

# バカとテストと召喚獣 ～仮面を被った男～

木原@ウィング

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

文月学園に通う2年生の吉井明久。彼は学園始まって以来の《観察処分者》にして生粋の愛すべきバカである。

……というのは、表の顔である。裏の顔は成績優秀、文武両道！そして人知れず悪と戦う「仮面ライダー」だった!!

この男、学生で、仮面ライダー!!

趣味全開の作品です。暖かい目でご覧ください

感想、批評ドシドシお待ちしております!!

# 目次

プロローグ	1
原作キャラの設定・変更点	4
1話 前編 なぜ、彼はFクラスなのか	18
1話 後編 彼らは吉井の何なのか	28
2話 変身はどう行われるのか	45
3話 仮面ライダーとは何者なのか	62
3・5話 戦いの中、何が有ったのか	74
4話 戦後の彼らは何を思うのか	
5話 再会した彼らは何を思うのか	85
6話 惨劇はどうやって起きたのか	96
7話 波乱を呼ぶのは誰か	108
8話 駆けつける戦士は誰なのか？	124
9話 立ち上がる者達は何処か？	148
	164



# プロローグ

プロローグ

明久 side

「はあ、はあ！ 急がないと!!」

僕、吉井明久は走っていた。

昨日は、「ちよつとした面倒事」に有ったおかげで寝不足になっていつの間にか家のベットで眠ってしまっていたらしい。

で、ついさつき起きて時計を見てみたら時間が8時10分だった。

因みに、今日から僕は文月学園の2年生だ。そして、今日がその2年生最初の日で授業開始時間が8時30分。

僕の家からここまで全力疾走で学校間についたのが8時25分だった。正直、遅刻するのを覚悟していた。

「おはよう、吉井」

「あ、鉄……西村先生。おはようございます」

僕は校門の前に立って居た鉄人こと、西村先生に挨拶する。

「吉井。今、先生の聞き間違いでなければ鉄人と言いかけなかった？」

「いえ、西村先生。気のせいです」

「そうか……それと吉井、これを」

西村先生はそう言つて箱から封筒を取り出し、僕に渡して来る。その封筒には『吉井明久』と書かれていた。

「振り分け試験の結果だ……だが、お前は」

「それ以上言わなくて良いですよ。これは僕のせいですし」

西村先生は少し申し訳なさそうに顔を背けながら謝つてくる。

西村先生は悪くない、悪いのは振り分け試験を受けなかった僕なんだから。

「吉井……俺達は、もう一度だけ振り分け試験をお前に受けさせたかったが」

「気にしないでくださいって、学園の事情は分かっているつもりです。僕だけを特別扱いらしたら示しがつかないんですよね？」

「……そうだ、だから済まなかった」

「そう何度も謝らないでくださいってば。先生がそう何度も『ただの生徒』に簡単に頭を下げないでください」

「ただの生徒なものか！ お前は、この学園の、いやこの街を……」

「ただの生徒ですよ。ただ、ちよつとバカでお人好しな『観察処分者』ですよ」

僕はそう言つて西村先生に告げて教室に向かう。  
封筒の中の紙には《Fクラス》と書かれていた

西村先生 side

吉井が学校に來た。俺としては、とても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

吉井明久、成績不良で問題行動ばかりを起こす『觀察処分者』という《学園の恥》《バカの代名詞》など、不名誉な称号を欲しいままにしている。しかし、それは本当の奴ではない、本当の吉井明久は成績優秀で文武両道、この学園の誇りにしてこの学園が誇る優等生。

しかし、吉井はそれを表には出さない。出せば……この学園のみんなを「危険にさらす」からである。

この真実を知っているのはこの学園にいる者だったら教師を除けば吉井の友人たち、そして吉井に「助けてもらった事のある」生徒のみだ。

そもそも、あいつが振り分け試験を受けられなかったのだったあいつが……「戦つてくれたから」なのに俺達は、吉井に何もしてやれない!!

「吉井……俺達は、お前の手助けだったらいくらでもしてやる。だから……」

俺の眩きは誰にも聞かれることなく、空に消えた

## 原作キャラの設定・変更点

名前 吉井 明久

・ 2―F 所属

・ 原作、この小説の主人公

・ 身長、体重は原作と同じ。

・ 過去にいじめにも似た行為をされていた。その時のトラウマからか自分一人で物事を抱え込む傾向に有る

・ そのせいか、秀吉、平賀、立花、菊野、生澤達が異様なまでに明久を守ろうと行動する

・ ある事件から街の人間、そして文月学園のみんなを守るために「仮面ライダー鎧武」となつて戦っている

・ 性格は、バカな発言ばかりして周りは呆れているが、実際は天才

・ 敵方の襲撃に備えて学園で問題行動ばかりを起こし、戦闘になつた場合は全て自分が壊したのだろうと思わせるため

・ 仮面ライダーとして戦っているためか、危機回避能力は人一倍有る



・仮面ライダーとしての過酷な体験から時々、独特の雰囲気を持つようになっており一部の女子たちから人気がある

・優子に対しては、恋愛感情も有るが恋愛感情とは別に特別な思い入れがある（これも過去の事件により）。

・キレるとオレンジアームズがブラッドオレンジアームズに変化してしまう

### 〈召喚獣〉

服装：原作の通り、改造学ランでくたびれた仕様になっている。

武器：木刀。ずっと使用してきた愛刀でもある。

### 腕輪：『変身』

・自分の点数を移し身として消費し、その消費した点数の時間分を仮面ライダーとして召喚獣を変身させる。

それは例え自分の点数が0点となった時でも予め能力を使用しておけば、その点数で復活する事もできる。

・通常はこの『能力』のみだが、『観察処分者』、『歴代ライダーロックスード』の使用で更なる応用を利かす事ができる。その内の一つが、自分の召喚獣だけでなく、他人の召喚獣も変身させる事ができる

・緊急時は腕輪が無くとも変身可能で物体干渉が出来る

ようになる

名前 木下 優子

・ 2 | A 所属

・ この小説のメインヒロイン

・ 設定は基本的に原作と同じ優等生

・ Aクラスの纏め役として、代表である翔子を助けている

・ この小説では過去に明久に助けられ、彼に想いを寄せる。性格も原作に比べて丸くなっている

・ ある事件をきっかけに「明久の力になりたい」と体を鍛え、男子にも引けを取らない程になる

・ 「仮面ライダーマツハ」に変身できる

〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：不明

・ 現時点では不明

名前 木下 秀吉

・ 2—F 所属

・ この小説のメインキャラ

・ 設定は性別が女性となっていてるところ以外は、基本的に原作と同じ

・ 実は男装した女子。知っているのは一部の生徒のみ

・ 明久の境遇を聞き、なんとか力になろうとしている。その為、原作より身体を鍛え

た

・ 「仮面ライダーネクロム」に変身する

・ 姉の優子が明久に想いを寄せている事に気付き、応援している

・ 明久に暴力を振るう姫路、島田を嫌っている

・ 自身も明久に好意を抱いている

〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：不明

・ 現時点では不明

名前 坂本 雄二

・2―F所属(代表)

・この小説のメインキャラ。

・設定は基本的に原作と同じ。元『神童』にして、『悪鬼羅刹』。

・明久の現状を知っており、自身も協力しようという思いが強くなった為、原作のような行動はあまり見られない。

・翔子との事は、明久の自分たちに対する思いを知り、逃げることを止めて真剣に向き合い、素直に認めるようになった。

・学力が全てではないという証明、また翔子への想いがAクラスとのエキシビジョンゲームを通じて達成された為、次の目標が、自分達を間接的に守り、自分を後押ししてくれた明久に応え、その使命を一緒に背負う事になる。

・元『神童』だった頃の集中力を活かし、戦闘訓練、目下勉強中である。

・「仮面ライダー龍騎」となって明久の窮地を救う。

〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：『召喚』

・点数を消費して、龍騎の相棒であるドラグレッターを呼び出してファ

イナルベントを放つ。ファイナルベント時は、キックもしくはパンチのどちらかを強化する事ができる。

強化した力が大きければ大きいほど攻撃力が増すが、その分だけ点数の消耗も激しくなる。

名前 土屋 康太

・2―F所属

・この小説のメインキャラ。

・設定は原作と違い、明久のサポートに回る『忍び寄る影（ムツツリーニ）』という異名がある

・この小説内においては、エロでなく、人間の体について、そしてその神秘性の知識として『保健体育』が活かされている描写がある

・彼も仮面ライダーとしての明久の行動を見るうちに、自身もそれに応じて答えようと思っっている

・特に明久の境遇を知り、また明久自身も自分を信頼してくれている事を悟り、なんとかして彼の負担を減らせるようにと色々動いている

・教師と取引し、ある程度の監視カメラ等の設置を許容して貰う事を条件に、学園の

情報操作に協力。基本的には防犯上のもものとし、学園内での戦闘時の映像は自身が保有する事を教師に認めさせている。

・ 明久のピンチに自身も「仮面ライダーエターナル」となり明久の元に駆け付ける。

〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：『加速』

・ 動きによって消費する点数が異なる。

名前 姫路 瑞希

・ 2―A所属（2―Fより2―Aへ）

・ この小説のメインキャラ。

・ 設定は基本的に原作と同じ。

・ 性格はあくまで純粋。この小説において、Fクラス（主に美波）に影響されて、歪んだ性格となった。

・ 美波の手引きによってイマジンと契約した事で時間を奪われかける

・ 明久が仮面ライダーとして戦っているとところを助けられ、性格は元の純粋な物に戻った。その後、久保達に言われ自身の現状を知り改心し、Aクラスとなった

・明久への思いは健在。特に最近の明久が纏う雰囲気、彼に何かがあったという事は理解している

・なお、殺人料理の威力も健在。しかしAクラスの賢明な努力で徐々にだが、修正されていく。

・自分がかつて手にした力がいかに恐ろしい物なのかを理解しており、力に溺れていく美波を止めようとする

### 〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：『熱線』

・攻撃が当たると炎に包まれ、基本的に点数が高くとも相手を戦死に追い込む。点数の消費が激しい。

名前 島田 美波

・2-F所属

・この小説のメインキャラ。

・設定は基本的に原作と同じ。

・原作と同じく、明久に対して好意の裏返しのような暴力ばかりを振るい、明久の事

を知っている者達からは嫌われている。

・彼女にしてみれば明久に近付きたいとは思っている。しかし周りは教師も含め彼女が明久に近付くという事が暴力を振るいにいくと誤解されるようになる

・事あるごとに問題を持ってくるため、ライダー達から厄介がられている

・ガイアメモリ、ロックスード、欲望のメダル etc を使い明久を自分の物にしようとする

### 〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：不明

・現時点では不明

名前 霧島 翔子

・2-A所属（代表）

・この小説のメインキャラ。

・設定は基本的に原作と同じ。

・原作とは違い、かつて明久に助けられて暴力を振るう事は無い。

・自身が持つ雄二への想いが認められたので、交際を始める。



・他のメンバー同様、明久の境遇を知っており、雄二同様、明久のサポートをするように行動していく。

・土屋のエターナルメモリをはじめロストドライバー、ガイアメモリの制作に貢献した。

### 〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：不明

・現時点では不明

名前 久保 利光

・2-A所属

・この小説のメインキャラ。

・設定は基本的に原作と同じ。

・過去に明久に助けられ、親友となったので、道を踏み外す事はなくなった。

・明久の状況を理解し、彼も自分の出来る事を探して行動するようになる。

・Aクラス男子の筆頭であるので、基本的に彼が男子を纏め、翔子をサポートしてゆく（女子を纏めるのは優子）。

・翔子と共にガイアメモリ、ロストドライバー、ダブルドライバーの制作に貢献する  
〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：『鎌鼬（かまいたち）』

・風の刃を発生させ、相手を切り裂く。威力に応じて点数を消費する。

名前 工藤 愛子

・2-A所属

・この小説のメインキャラ。

・設定は基本的に原作と同じ。

・現状は原作の通り。優子が明久に惹かれているのを知り、応援しようと思っている。

・「仮面ライダードライブ」に変身する

・自身のドライブ、優子のマツハのシステムを作ったクリムを父に持つ。

〈召喚獣〉

服装・武器：原作と同じ。

腕輪：不明

・現時点では不明

名前 平賀源二

・ 2―D 所属（代表）

・ この小説では、立花と同じく吉井の小学生時代からの友人

・ 使者として来た吉井に手を出そうとしたクラスメイトをためらいなく立花と共に沈めるほど喧嘩も強い。

・ 吉井が仮面ライダーなのを知る数少ない人物

名前 根本 恭二

・ 2―B 所属（代表）

・ 原作と殆ど同じで卑怯な戦術が得意

・ 小山 友香と共同してFクラスを倒そうとスカルのメモリを使い、スカルドーパントとなる

・ 康太に敗北後、明久の説教で改心し、翔子達からロストドライバーを受け取り、自身の罪滅ぼしを目的に「仮面ライダースカル」になる

・ 自分と同じ罪を起こそうとする相手を本気で止めるハードボイルドな男になる

名前 小山 友香

・2―C所属（代表）

・原作と殆ど同じでヒステリック

・根本 恭二の彼女で根本と共にFクラスを倒そうとしたが秀吉の作戦で予先をAクラスに変更する

・Aクラス戦時にアクセルメモリを使い、アクセルドーパントとなる

・優子と菊野&生澤のマツハ・Wコンビに敗北後、根本と共に明久から説教を受けて改心する

・クリムからアクセルドライバーを渡されて過去に犯した罪を償う為、そして2度と同じ事を繰り返さないことを誓い「仮面ライダーアクセル」となる

オリジナルキャラクター

名前 立花 信（たちばな のぼる）

・2―D所属

・明久の小学生時代からの友人にして「仮面ライダーバロン」

・振り分け試験日に、明久に学校に行くように言われ明久が振り分け試験を受けられなかった事を知らなかった。

・上記の事を気にしており、明久にもう一度振り分け試験を受けるように学園に

頼み込んでいる

・ 明久を害そうとする人物は一切の容赦をしない。

名前 菊野 公平 (きくの こうへい)

・ 2 | C 所属

・ 明久とは中学時代からの友人

・ 幼馴染に生澤 麻里がいる

・ 吉井の手助けがしたいと思い、Aクラスの翔子と久保にダブルドライバーの制作を依頼する

・ 麻里と共に「仮面ライダーW」に変身できる

名前 生澤 麻里 (いけざわ まり)

・ 2 | C 所属

・ 明久とは中学時代からの友人

・ 菊野とは幼馴染でいつも一緒に居る

・ かつて吉井に助けられたことにより、彼の正体と彼に好意を抱くようになる

・ 菊野と共に「仮面ライダーW」に変身する

# 1話 前編 なぜ、彼はFクラスなのか

## 第1話 前編

吉井「ええ〜つと? Fクラスは……」

そう言いながら僕は廊下を歩いていた。

2年目だけどやっぱりまだこの学校にはなれない。まあ、あんまり来れていないから仕方ないか。

?「あれ? 明久君?」

吉井「ん?」

僕は後ろから声をかけられて振り返る。

そこには僕の好きな女の子、木下優子さんがいた。

優子「こんな所で何しているの?」

吉井「いや〜それがちよつと寝坊しちゃつて〜」

僕は頭を掻きながら優子さんに事情を話す。

昨日の「用事」を片づけて家に帰ったらいつの間にか眠っていたと話したら優子さん

は少し呆れたようにため息をついた。

優子「……あのねえ、明久君。私たち、いつも言っているわよね？　無理はしないで」

吉井「うん、そうだね……」

優子「私だって明久君が頑張っているのは知っているけど、私だって明久君の力になれるんだよ？　だって私「優子さん!!」っ!!」

吉井「……それについては、前にも話したでしょう？　それにここで話さないほうが良いよ」

僕の発言を受けて、優子さんはハツとしてすぐに謝罪した。

優子「……ごめんなさい、軽率だったわ」

吉井「良いんだよ、それじゃあ僕もう行くね」

優子さんにそう別れを告げて僕は再びFクラスに向かう。

優子 side

明久君、いつも私が力になるって言ってもああ言って力を借りようとしなない。

理由は、何となくだけ分かる。多分、私が足手まといだからだ。

私は……吉井明久君が好きだ。私は、過去に彼に助けられた。その時から私は彼が好きだった。

だから、彼の役に立ちたい一心で自分を鍛えたつもりだった。でも、彼はそんな私を一向に認めてくれない。一体なんでなんだろう……

優子「明久君、私だってあなたの役に立てるんだよ？」

そう言つて私は自分の鞆から有る物を取り出す。

そう、これが有れば彼の力になれる。

でも、私はまだ……

？「優子、大丈夫？」

優子「へえあ!!」

いきなり後ろから声をかけられたからか、とんでもなく情けない声をあげてしまった

優子「え、あ、代表!! お、おはよう!!」

翔子「うん、おはよう……」

声をかけて来たのは私の所属するAクラスの代表、霧島翔子だった。

私は向き直つて彼女と話し始める

優子「どうしたの？ こんな所で」

翔子「そういう優子こそ」

優子「私は職員室からの帰りよ？」

翔子「私は、雄二の様子を見に行っていた」



雄二、ああ坂本君の事か。相変わらず代表は坂本君にお熱みたいね。

まあ、私も明久君にお熱だからヒトの事を言えないんだけどね。

翔子「さつき、吉井と話をしていた？ 彼はAクラスには来ないの？」

優子「……代表、明久君はAクラスにそもそも来ないわ」

翔子「何で？ 彼の實力なら「代表」」

優子「……彼が何で、この学校で「馬鹿を演じている」のか。忘れちゃった？」

翔子「……失念していた」

優子「まあ、明久君が来れないのは残念だけどFクラスには多分「みんな」いるだろうしね」

翔子「うん、さつきちよつと見たんだけど秀吉に土屋も居た。……それに、島田も」  
優子「……島田さんがいたかあ。それだけが心配だけど秀吉たちに何とかしてもらえないか」

島田さん、その名前を聞いた瞬間。私は物凄い不快感を感じた。

彼、吉井明久をいつも理不尽な事で暴行する彼女を私たちは嫌悪している。

優子「代表、もう戻りましょう。そろそろチャイムがなっちゃいそう」

翔子「うん、戻ろう。優子」

そう言って私達2人はAクラスに戻っていった

優子 side out

雄二 side

ふむ、振り分け試験時に点数を調整したから簡単にFクラスの代表にはなれたが……  
肝心のアイツが遅刻ギリギリってのはどういう事だ？

まさか、また厄介ごとに巻き込まれているのか？

吉井「すいません！ 遅れました」

雄二「遅いぞ！ 早く座れウジ虫野郎!!」

吉井「ちよつと！ 着いて早々なんで罵声を浴びせられるわけ!」

雄二「冗談だ、早く座れ明久」

俺の罵声に的確にツツコミを入れてくる。見た感じでは大丈夫そうだな。

まあ、こいつがそう簡単にくたばる訳は無いんだがな。

吉井「分かったよ。……ところで、雄二。僕の席は？」

雄二「ああ、適当に座ってくれ。特に決まっていなからな」

俺のその言葉に少し驚いた様子だったが、俺も最初は驚いたさ。

普通は座席くらいは決めておくもんだらう？

流石にここまで酷いとは思わなかった。

吉井は開いている窓際の席に座った。そこは秀吉の隣だった。

まあ、秀吉にはそこに座るように頼んでおいたんだがな。

秀吉「明久よ、初日から遅刻ギリギリとは……何か有ったかの？」

吉井「いやうちよつと昨日の夜までゲームをしてさつき起きたんだよねえ」

俺と、秀吉、それに土屋にはそれが嘘だとすぐに分かった。恐らく、例の「用事」で起きた事を片づけていたんだらう。

ガラガラツ

その時扉が開き、福原先生が教室に入ってくる。

「お早う御座います、HRを始めますので皆さん席について下さい。……坂本君、君も席についてください」

福原先生に言われたし、俺も席に座るとするか。

福原「みなさんFクラスの担任の福原です。漢字は……」

うん？ 黒板に名前を書こうとして止めた？ 何でだ？

……おい、まさかチョークすらないのかこの教室は!?

福原「それでは自己紹介をしていってください。」

福原先生に言われ廊下側から順番に自己紹介していく。

土屋「……土屋康太。趣味は、写真を撮る事」

秀吉「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。Aクラスには姉の木下優子がおる。みんなよろしく頼むぞ。ちなみにわしは男じゃ」

「秀吉可愛い〜!!」

「このクラスのオアシスじゃー!!」

「結婚を前提にお付き合いしてください!!」

おい、木下に愛の告白した奴は表に出ろ。

見ろ、秀吉が養豚場の豚を見る目をしてるじゃねえか。

あいつには好きな奴がいるんだよ。

あ、アイツが男だっっていうのは嘘だ。理由は……アイツが過去に色々有ったとしか言えないな。

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は読み書きが苦手です。趣味は……吉井明久を殴る事です☆」

……あのバカ女もこのクラスだったな。これは警戒しておかないといけないな。吉井の身の安全のためにも、アイツは近づけさせない様にしないとな。

秀吉と土屋も俺の思惑が分かったみたいだな。俺の目を見ただけで領いてくる。

吉井「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください」

「『ダアアアーリーリー……』」

野郎どもの汚い歓声が響く。てかうるせえ

やっぱりこのバカばっかのクラスにいるのは吉井の為にならないな。

そう結論づけた時、教室のドアがひらいた。

「あの、遅れて、すみません……」

姫路か？ 随分遅かったが、体調が回復したのか？一応聞いてみるか。

雄二「姫路」

姫路「は、はいっ。何でしょうか？えーつと……」

雄二「坂本だ。このFクラスの代表でもある。よろしく頼む」

姫路「あ、姫路です。よろしく願います！」

雄二「一つ聞いておきたいんだが、振り分け試験の時の風邪はもう大丈夫なのか？」

姫路「あ、はいっ。一時的な熱だったので、もう大丈夫です」

雄二「そうか、ちよつと確認しておきたかったんだ。すまん」

姫路「いえ、そんな……え、よ、吉井君!？」

姫路が秀吉の隣に座っていた明久の顔を見て驚いている。ああ、なるほど……

雄二「姫路。明久がブサイクですまん」

吉井「ちよつと雄二!？何を言ってくれちゃっているのかな!？」

姫路「そ、そんな！目もパツチリしてますし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブ

サイクじゃないですよ？」

姫路のフオローに吉井が涙を流して喜んでる。……吉井、あとで謝るよ。

あ、それよりも秀吉がやばい。物凄く不機嫌そうな顔になってる

福原「それでは、あとは代表の坂本君だけです。自己紹介を」

雄二「ああ、すいません。福原先生、それなんです。教壇を少し借りてもいいですかね？」

福原「まあ、構いませんよ」

そう言つて福原先生は教壇を譲つてくれた。

さて、それじゃ始めるとするか。召喚戦争を!!

雄二 side out

吉井 side

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。」

そこで早速皆に聞きたいんだが、——かび臭い教室、古く汚れた座布団、薄汚れた卓袱台、Aクラスは冷暖房完備の上に、座席はリクライニングシートらしいが——

…不満はないか？」

雄二は教壇に立っていきなりそんなことを言い出す。おいおい雄二、いくら何でも振

り分けられた当日に召喚戦争を仕掛けるつもりか？

僕としてはあんまり乗り気にならないんだけど

「「「大有りじゃあー！ー！！」」」

まあ、このクラスの奴らがこう思うのも仕方ないけどこんな教室が嫌だったら勉強して成績を上げて来年もつと良いクラスに行けばいいだけじゃないか。

なんでそんな事も思いつかないのか不思議だ。

雄二「俺達はこのクラス状態の改善を求めろ！！　そのために、俺達はAクラスを打倒する！！」

雄二の宣言にクラス中は熱狂する。まあ、僕と秀吉と土屋と姫路さん以外だけだね。

後編へ続く

# 1話 後編 彼らは吉井の何なのか

雄二 side

須川「しかし、坂本よ。そんなAクラスに挑むなんて勝てる要素が俺達にあるのか？」  
盛り上がったいたクラスに水を差すような発言をする須川。

まあ、こういう意見が出るのは予想していたさ。

雄二「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている」  
俺の発言に教室がざわつく。まあ、こんな最底辺クラスがAクラスに勝てる要素があるなんて言われても信じられないよな。

仕方ない、ここで教えるとするか。

だが、その前に……

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

土屋「……!! (ブンブン)」

姫路「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振る否定のポーズを取って弁解しようとする土屋。いや土屋、顔に付いた畳の跡を隠しながら否定しても説得力が無いぞ。



本当なら不屈きな事をしている土屋に説教をする所だが、今はそんな事をして時間を無駄にしたくないから無視だ。

雄二「土屋康太。コイツがああの有名な、忍び寄る影、ムツツリーニだ」

土屋「……………!!(ブンブン)」

土屋は自分がムツツリーニだとばれて焦っているのかさつきよりも強く否定する。ムツツリーニと言う名はこの学校ではよく知られている。その名は男子、女子の両方に謎の人物として尊敬されるが、俺は全くその気が無かった。

『ムツツリーニだと……………?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………?』

『だが見ろ。ああまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

周りが納得していると、土屋は否定しながらも頬に付いた畳の跡を隠していた。もう分かってしている事なのに、あそこまで必死に否定すると逆に感心してしまう。

「??」

姫路だけが頭に「?」ばかり浮かべながら分からないと言う顔で首を傾げている。俺としては知らない方が良いと思う。

雄二「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知っているは

ずだ」

姫路「えっ？わ、私ですかっ？」

雄二「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

姫路を一番の頼りにしているみたいに感じられるかもしれないが彼女はあくまでも1つの戦力だ。姫路だけに頼るようじゃダメだろうと思いつながら俺は続ける。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『ああ。彼女さえいけば何もいらぬ』

さつきから姫路や秀吉に熱烈なラブコールをしている奴は誰なんだ？ 姫路や秀吉の事が好きなら思い切って告白をすれば良いと思うんだが……。いや、そんな事をしたら明久が黙っていないか。アイツは以前から姫路や秀吉の事が気になっていたからな。

雄二「木下秀吉だっている」

ほら、告りたい奴は告れ。

玉碎する未来しか見えないがな。

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

おいおい、さつきまでラブコールを送っていた奴は何を考えている。秀吉の番になつ

たのにラブコールをしないのは怖気づいたからか？ 臆病者どもめ

雄二「当然、この俺も全力を尽くす」

俺はさつきまでのコールを出していた奴に失望しながら、代表として責任感を持った表情をしながら言う。

『確かに何だかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良なんかだったのか』

『実力がAクラスレベルが二人もいるって事だよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

うん、この調子だったら大丈夫そうだな。

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シ～ン——

さつきまで上がっていた士気が、一気に落ちてしまった。士気云々はいつでもいいのだが、俺は思わず脱力してしまった。一体俺は何をミスしたというのだ!!

吉井「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

そこで俺は己の失策に気が付いた。

そうだ、吉井はこの学校では表向きでは《学園一のバカ》って言われているのを忘れていた!!

普段の吉井を見ている分、そっちの事を忘れるなんてこの上ない失敗だ!!

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、知らん』

『でもアイツ、以前から教師達に説教されてた奴じゃないか?』

吉井「ホラ! せっかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし! 僕は雄二たちと違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを——雄二、なんで僕に呆れた視線を送るの!?! 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう!?!」

雄二「士気は関係無い。俺が呆れているのは、自称『普通の人間』であるお前が、どうしてこうもみんなにバカにされているのか、そこを詳しく聞かせてくれないか?」

吉井「うぐつ!」

俺の台詞に、吉井は痛い所を突かれたかのように押し黙った。どうやら身に覚えがあるみたいで、俺に何も言い返せないみたいだ。しかし、これは吉井が普段からバカの演技をしていたから出来た芸当だ。これからは気を付けなければいけない。

雄二「そうか。皆は余り知らないようだから教えてやる。こいつの肩書きは《観察処

分者》だ」

須川「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

言うまでもなく、その肩書きは他の生徒も知っていた。

しかし、こいつらは吉井が進んで《観察処分者》になったという事を知らない。

今回はそこに付け込ませてもらおう。

吉井「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄二「そうだ。バカの代名詞だ」

吉井「肯定するな、バカ雄二！」

《観察処分者》。学園生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分で、明久がこの学園で唯一、その処分を受けている。

どうしてその処分を受けたのかと俺は過去に明久に聞いたのだが、当の本人は当然の報いだからと言ってはぐらかしている。アイツは俺達に迷惑を掛けない様に気を遣っているんだろうが、何を今更と思つた。けどアイツがそこまで頑なにしていると言う事は、誰かを守る為に敢えて自らそんな汚名を被つて守ろうとしたのだろうと俺は考えた。あんなに決意に満ちた眼差しで俺を見ていたのだから。

と、俺がそんな事を考えていると……。

姫路「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首を傾げながら何なのかと俺に聞いてきた。まあ、成績優秀の姫路には、とても縁の無い物だから知らないのは当然だろう。

そんな姫路の質問に俺は答える事にしよう。

雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそう言った類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすと言った具合だ」

俺の姫路からの質問の解答に姫路はキラキラと目を輝かせながら、明久に若干の羨望と尊敬の籠った視線を送る。

そんな姫路の視線に……。

吉井「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ、姫路さん」

吉井は姫路に向かって手を振りながら否定した。

実際、吉井の言うとおりだ。

召喚獣を自分の思い通りに動かせると言うのは凄く便利で、腕力も普通の人間の何倍もある。その気になれば岩だって砕く事が出来るだろう。

確かに一見、素晴らしい機能だと思われる。だがそれとは裏腹にかなりのデメリットがあった。

何故なら、召喚獣は教師の監視下で呼び出さないといけないからだ。つまり、吉井が便利に使えたくても使えない。教師が召喚獣を使つての雑用作業を明久に任せ、吉井は

教師に頼まれた雑用作業をする。ただそれだけの事だ。だから先ほど言ったメリットは教師の監視下でやっているに過ぎなく、吉井には自由に召喚獣を活用する事が出来ない。

……そう、表向きには。あいつは実は教師がいなくとも召喚獣を呼ぶことは出来る。

それはいつもアイツが「ある事」をなすために特例として許可されているからだ。

しかし、それに加えて物理干渉が出来る召喚獣に負担が掛かると、何割かが召喚者の明久にフィードバックされる。簡単に言えば、召喚獣が重い物を持つて移動している最中に疲労していると、召喚者にもその疲労の何割かが返ってくるのだ。更には物にぶつかった時の痛みも、そのまま帰ってくる。聞くだけで、これはもう罰だろうと思うだろう。

……そんな役職に、自分から付いたアイツの覚悟。それはアイツが過去に「守れなかった」後悔から着くことになった物だ。お前は、何でもかんでも背負いすぎなんだよ。だからこそその《観察処分者》だ。凄い事でも便利でもない。学園にとつて問題児とされる相手に課せられるペナルティ。俺が領いて言ったバカの代名詞と呼ばれる理由がそこにあるのだ。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ?』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

当然、そんなペナルティを課せられた奴が自分から戦闘に参加する気は無い。召喚獣が戦闘中によって受けた痛みが自分に帰ってくるのだから。

雄二「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

吉井「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよな？」

ただ単に吉井の恥を暴露した様に思えるセリフを吐くがこれは建前だ。

アイツは、不測の事態の時に動いて貰う為にあんまり参加してほしくない。

雄二「ま……まあ、他の召喚者達とは違って、召喚獣の扱いには慣れてるから、それなりの役には立つぞ」

吉井「……………雄二、今更フォローしても遅いんだけどね」

雄二「と……とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

実はさつきから秀吉が物凄くこっちを睨んでいることに気が付いた俺は冷や汗を掻きながら自信を持って言い切った。

雄二「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

雄二「ならば全員筆ペンを執れ！ 出陣の準備だ！」



『おおーっ!!』

雄二「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ!!』

姫路「お、おー……」

「……………」

下準備が出来たと言わんばかりに俺が号令を出すと、クラスの生徒達は一斉に雄叫びをあげる。姫路も小さく拳を作り掲げていた。

俺は、吉井が今回の“試験召喚戦争”を起こすのに反対だったのを予想していた。

でなければクラス全員に鼓舞させるかの様な演説と、勝利の鍵を握っているであろう土屋、姫路、秀吉。そして吉井を持ち上げたのだから。俺も自分の過去の功績を利用して、見事にクラス全員の心を掴んだ……吉井の方は余計だったが。そして最後には参加しようと号令をして、クラス全員は“試験召喚戦争”に参加しようと意気込んでいる。雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

吉井「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

吉井は少し不安げに俺に聞いてくる。

まあ、確かに下位クラスが上位クラスに宣戦布告何てすればひどい目に遭うだろう。しかし、だからこそ今回の戦争をDクラスにしたのだ。

雄二「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

吉井「本当に？」

雄二「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

吉井に優しく諭す様に言う俺であるが、ここまで言うのには理由が有る。なぜなら、Dクラスには「アイツ等」が居るからだ。

雄二「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

吉井「……わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

雄二「ああ、頼んだぞ」

俺の言葉を受けた吉井はDクラスへ向かう為に教室から出て行った……。

「……さて、雄二。少しO☆H☆A☆N☆A☆S☆I死体のじゃが？ 良いかのう？」

雄二「え？」

「!!」

俺は声をかけられて後ろを見ると、顔に影を落とした秀吉が立って居た。

それを見て、俺は死を悟ったんだ。

あ、あと秀吉？ お話したいいって文字のしたいが死体になっているぞ、それはま

ずつぎやああああああああ

!!!!!!!

雄二 side out

吉井 side

吉井「でも、Dクラスかゝ誰か知り合いは居るかな？」

僕はそう思いながら廊下を進んでいるといつの間にか、Dクラスの前に付いていた。

吉井「ここか、……すいませ〜ん！」

僕はそう言つてDクラスの扉を開ける。

するとDクラスの人たちが僕を見てひそひそと話し始める。

「誰だ、あいつ？」

「ほらあれだろ？ 例の《観察処分者》」

「あく吉井君、今日もカツコイイなあ〜」

「分かる〜！ なんか、あの纏っている雰囲気かね〜」

「でも、何の用で来たんだろ？」

平賀「……吉井？ 吉井じゃないか!!」

え、この声つて……

吉井「え、平賀君じゃないか!! Dクラスだったんだ!!」

平賀「そうだよ！ 久し振りじゃないか!! 元気そうでよかつたよ」

吉井「そつちこそ、良かった!! あれから何も無いみたいだね!!」

僕はこんな所で友人と会えるなんて嬉しい事も有るんだな!!

そんな会話をしているともう1人の友人も入ってきた。

立花「何だ、トイレから戻って見たら吉井がこのクラスに来てるなんて!! 久し振りが吉井!!」

吉井「立花君まで!! そっか、雄二の言っていた大丈夫だって理由は平賀君と立花君がいるから大丈夫だって事だったんだ!!」

立花「雄二? 雄二が何か言っていたのか?」

平賀「まさか、アイツ吉井に何かしたんじゃ?」

立花「よし、殺そう」

吉井「なんでそうなるの!? いや、違うから、なにもされていないから!!」

平賀「じゃあ、なんでDクラスに?」

あ、そうだった。危うく忘れるところだった

僕がDクラスに来た使命を果たさないと。

吉井「えっと、平賀君。このクラスの代表って誰かな?」

平賀「代表? それだったら俺だけ?」

吉井「本当? じゃあ、丁度良かった」

立花「おいおい、わざわざ代表に用があるって事は相当な事だよな?」

吉井「うん、平賀君……僕達、Fクラスは君たちDクラスに宣戦布告する!!」  
僕の言葉にDクラスが騒然とした。

一部の男子生徒がこちらを睨んでくるが僕は平賀君をずっと見つめる。

それを受けて、最初は驚いていた立花君と平賀君は笑い出した

平賀「はははは!! まさか、吉井達から初日に宣戦布告されるなんて」

立花「全くだ、本当にお前と言い雄二と言い俺達の予想の斜め上を行ってくれるな!」

この2人は笑いながらも僕たちの挑戦に嫌な顔はしなかった。

それどころか待ち望んでいたようにも取れる言葉を言ってくれる。

Dクラスの他の生徒たちは半分は不安、残りの半分は期待に満ちた顔をしている。

……でも、その内の男子生徒たちが僕に近づいてくる。

「おい、お前。《学園の恥》の《観察処分者》だろ?」

「そんな奴が使者で来るとか、バカにしてんのか?」

「おい、こいつを締め上げてFクラスにとどけてやろうぜ!!」

「任せろ、腕の一本や二本をへし折ってやる」

あ、なんか物凄く危ない。

でも、逃げようにも1人に胸ぐらをつかまれていて逃げられない。

「おい、《学園の恥》。どこを何発殴りたい?」

吉井「出来れば殴られたくないな」

「ふざけんな！ やつちまえ!!」

1人の生徒の叫びと共に残りの生徒が僕の事を殴ろうとしてくる。

その時、

平賀「おい」

立花「テメエ等、吉井に何しようとしてんだ？」

底冷えるような声を発した2人によって僕の胸ぐらを掴んだ生徒と僕を囲んだ生徒の動きが止まった。

平賀「なあ？ 答えてくれないか？ 何で、お前らはFクラスの使者に暴行をしよう

としているんだ？」

「な、なんでって……下位クラスが宣戦布告してきたんだぞ!？」

「そ、そうだそうだ！ 舐められたままで終われるかよ!!」

立花「うるせえ、その口閉じて……眠ってる!!」

立花君はそう言うって僕の胸ぐらをつかんでいる生徒の顔面に容赦なくグーパンチをお見舞いする。

それを受けてその生徒は教室の床を転がる。しかし、立花はその人物の腹部をさらに蹴りあげる。

「お、おい！ 何してんだよ!!」

「同じクラスメイトになんで手を出してんだ!!」

立花「黙れ、お前等は吉井に手を出そうとしたんだ。言っておくが、俺は吉井に手を出す奴には容赦はしない。良いか、加減じやなくて容赦はしない」

平賀「それにさく何にも知らないお前らが吉井達をバカにしてんじやねえよ」

平賀君も立花君も聞く者が震え上がるような声で宣言する。

それを受けた他の生徒は悲鳴を上げながら逃げて行つた。

吉井「……なんか、ごめんね。迷惑かけちゃつて」

僕は平賀君や立花君、それに他のDクラスのみんなに謝つた

立花「気にするな、あれはアイツ等が悪い」

平賀「まあ、これは後で生徒指導室に呼び出しかもな?」

吉井「……そうなつたら僕も一緒に行くよ」

立花「まあ、気にするな。俺がやりたくてやつたんだからさ!」

平賀「まあ、他のみんなも見ていたし大丈夫でしょう」

「そうだよ、吉井君。あんまり気にしないで!!」

「さっきのはこつちが悪いんだから」

「そうだぜ、あんまり気にしすぎるな」

吉井「みんな……ありがとう！」

Dクラス生徒たちの暖かい言葉を受けて僕は頭を下げた。

平賀「それじゃあ、吉井。開始時刻はどうするんだ？」

吉井「そうだね、試召戦争は今日の午後という事でいいかな？」

平賀「ああ、こちらはそれで問題ない。みんなもそれで良いよね？」

「ああ、大丈夫だ！」

「これで勝ったら、吉井君と一緒に出かけできないかな？」

「抜け駆けは禁止だよ!!」

「Fクラス相手だつて油断しないぞ!!」

立花「……だ、そうだ。これで良いよな？」

吉井「うん、それじゃあまた後でね。2人とも」

平賀「ああ、楽しみにしてるぜ。吉井」

立花「お前が出てきても絶対に勝つからな？」

吉井「うん、でも……僕達も負けないよ!!」

僕はそう言つてDクラスを後にした



## 2話 変身はどう行われるのか

吉井 side

これは一体どういう事なんだろう？

Fクラスに戻ったら雄二がボロボロの状態で素巻きにされていた。

僕が使者で行っている間に誰がこんなことを？

秀吉「む、明久。戻ったか」

吉井「あ、秀吉。これどういう事？」

すうつと横から突然現れた秀吉に少し驚きながら雄二のこの状態について聞く僕。

それを聞かれて秀吉は少し顔に影を落として答えてくれた。

秀吉「わしは知らぬのじゃ。雄二がいきなりこうなっていたのじゃ」

吉井「え、でもこれって誰かが「雄二が勝手にこうなったのじゃ」いや、こ「雄二が勝手にこうなったのじゃ！」……うん、分かったよ」

秀吉の有無を言わせない迫力から僕は何も言えなくなってしまう。

それと気になったのもう一つ聞いてみたい事が有ったから聞いてみよう。

吉井「ねえ、秀吉。君は一体何処から来たの？ さつき教室に入った時は見えなかつ

ただけど？」

秀吉「わしはずっとここにおったぞ？ 明久が気が付かなかっただけじゃないのかの？」

吉井「え、そうだったの？ うーん、ちゃんと探したつもりだったんだけどなあ」

秀吉「それよりも明久よ。これから試験召喚戦争が始まるのじやろう？ その前にご飯を食べるのじや！」

吉井「そうだね、それじゃあ食べに行こうか」

土屋「……俺も行こう」

吉井「お、良いね。雄二はどうするの？」

雄二「行くから、これをどうにかしてくれ」

雄二はもともと動きながらこっちにお願ひしてくる。

今の状態は面白いけどこのままだとご飯を食べる時間が無くなりそうだから置いていくか。

さっきの意趣返しって意味も含めて。

吉井「じゃあ、秀吉、ムツツリーニ。行こうか」

雄二「おい待て！ 俺も行くって、これどうにかしてくれ!!」

雄二が凄いぎゃーぎゃー言っているから仕方ない。助けてやるか。

えくつとこがこうで、こうなって良し解けた。

雄二「助かった……礼を言うぞ明久」

吉井「吉井って言わなくていいの？」

雄二「もう良いだろう。アイツ等の前では他人行儀だったがさっきの俺の状態で別に  
もうそうする必要もなくなった」

吉井「？ どういう事？」

雄二「あくこつちの話だ。気にしないでくれ」

何だろう？ 雄二の考えが良く分からないよ。そして秀吉はなんでそんな怖い顔で  
雄二の事を睨んでいるの？

僕は疑問に思いながら食堂に向かうことにした。

吉井 side out

優子 side

今日の授業はFクラス対Dクラスの試験召喚戦争が行われるから全部自習になるら  
しい。

まさか2年生として新しいクラスに振り分けられた当日に試験召喚戦争を起こすな  
んでFクラスの代表は何を考えているのかしら？

翔子「優子、考え事？」

優子「うん、今日の授業が自習になっちゃったじゃない。なんで初日から授業を潰されないといけないのかなって」

翔子「……多分、雄二にも何か考えが有る筈」

優子「どうかしらね？ あの人の事だから面白そうだからって感じの理由かなって思うんだけど」

「そんな理由じゃねえよ」

優子「あら？ 噂をすればFクラスの代表じゃない」

翔子「雄二、おはよう」

雄二「おはようって……もう朝って時間でもないぞ？」

翔子「……朝は雄二に挨拶できていない」

雄二「そうだったか？ お前、朝にFクラスを覗いていなかったか？」

翔子「……覗いていただけ。挨拶できていない」

雄二「そうだったか。それじゃあ、おはようさん」

優子「それで、なんで試験召喚戦争を仕掛けたのよ。坂本君」

雄二「なんだ、木下姉も居たのか」

優子「ええ。さつきからずっとね」

雄二「そうだったか、で試験召喚戦争をなぜ仕掛けたかだっけ？」

優子「そうよ、こつちまで自習になつちやうなんて難儀なものよね」

雄二「すまん、だが俺達が試験召喚戦争を始めたのは……明久の為だ」

優子「……詳しく聞かせてくれないかしら？」

明久君の名前が出たのを聞いて私は真剣に坂本君の話を開始する。

坂本君曰く、明久君をFDクラスにおいては命の危険が有る。

Fクラスの男子たちは嫉妬深く、明久君が私達といるところを見られたら明久君に危害が及ぶらしい。だから、明久君にもう一度振り分け試験を受けさせるために試験召喚戦争を始めたらしい。

優子「……なるほどね、やっぱりあなた達だけじゃ明久君を守り切れそうにないんだ」

雄二「ああ、俺と秀吉、それに土屋だけじゃ不甲斐ないが守り切れそうにない。それに秀吉と俺は……明久と同じでそう簡単には動けないんだ」

翔子「……だからAクラスに試験召喚戦争を仕掛けたいけど、それをするには時期が早いつて事だね」

雄二「そういう事だ」

優子「……事情は分かったけど、その明久君は？」

雄二「あそこで秀吉と一緒に居る」

坂本君が指さした所には2人で仲がよさそうにお昼を食べている明久君と秀吉が居

た

それを見た瞬間、私は明久君の真横に立って居た。人間、本気を出せば瞬間移動が出来る者なのね。

優子「……明久君、何をしているのかな？」

吉井「ん？ あ、優子さん!! 何って秀吉と一緒にご飯食べているんだけど？」

秀吉「そうじゃ、今は儂と一緒にご飯を食べているのじゃ」

秀吉は嬉しそうに明久君の腕にしがみつきながらそう答えて来た。

その幸せそうな顔を見ると思わずほっこりしそうになるけど、ここはぐつと堪えな  
きや。

優子（ちよつと秀吉？ あなた、前に私と明久君を応援してくれるって言っていない  
かったっけ？）

秀吉（確かに応援すると言ったのじゃが、儂だって明久が好きなのじゃ！ 一緒に居  
たって良いではないか!!）

私と秀吉はお互いの目を見て意思疎通を取っていた。まあ、この子も明久君を好きなのは知っていたがそれでも何か嫌だ。いくら私の可愛い妹でも明久君だけは渡せない

!!

吉井「あ、そうだ。優子さんも一緒に食べない？」

秀吉「明久？」

優子「ええ、そうさせてもらうわね」

少し悔しそうにした秀吉に私は勝ち誇った表情をしながら明久君の隣に座る。

ああ、やっぱり明久君の隣は良いなあ。

優子 side out

秀吉 side

むう、明久め。姉上までも食事に誘うとは……まあ、儂も姉上もそれでも良いがもう少し儂の気持ちにも気が付いて欲しいぞ。

「おい、あれ見ろよ」

「Aクラスの木下優子にその弟、いや妹？ ええいどっちだ!!」

「どっちでも構わん!! あんな可愛い2人と一緒に食事をとるなど、羨まけしからん!!」

「あの2人、良いな〜」

「私たちも声かけてみる?」

先ほどからなにやら周りが騒がしいのお？ 何をそんなに騒いでおるのだ？

……それよりも、さつきから見えるあの黒い恰好をした奴等。あれは確かFクラスの奴ではなかったかの？

「総員に告ぐ！ 裏切り者、吉井明久を血祭りに上げよ!!」

「「「「うおおおおおおおおおおおお!!!」」」」

あ奴等、明久に手を出すつもりかの? もし手を出したら……この世に生きていることを後悔するほどの事をしてやるつもりだが覚悟は出来ておるのじやろうな?

雄二「何やってんだ、バカ共! さっさと戻って試験召喚戦争の準備をしろ!!」

なんじゃ、雄二が止めようとしておるの。別に止めなくとも儂がきつちり片を付けるというのに。

「止めるな雄二! あいつはゆる”せ”ん”!!」

「というか、こいつだつてAクラスの翔子さんと楽しそうに喋っていたぞ!!」

「「「裏切り者には死の鉄槌を!!!」」」」

西村先生「なんの騒ぎだ!!」

ぬ? 西村先生まで来たか。お、Fクラスの奴らがクモの子を散らすように逃げ出した。

流石は西村先生じゃの。

優子「何だったのかしら? あれは」

吉井「さ、さあ?」

秀吉「気にしないほうが良いのじや、バカ者どものバカ騒ぎじや」

西村「む、吉井に木下姉妹か。すまん、食事中に」



優子「いえ、気にしていません」

吉井「すいませんね、西村先生。あいつらには後できつく言っておくので」

秀吉「明久が言うては逆効果じゃ。ここは儂に任せてほしいのじゃ」

朝、儂にふざけた事を言った奴にも色々としてやらぬといけぬしの。

先ほども明久にさつきを向けた奴は大体は覚えておる。覚悟をしておくがよいのじゃ。

雄二「鉄、西村先生。お話ししたいことが」

西村「坂本、貴様いま鉄人と言いかけたか？」

雄二「気のせいです。それよりも大切な話があるんです。良いでしょうか？」

西村「……分かった、一応聞こう」

雄二「ここではちよつと無理そうなので職員室で良いですか？」

西村「構わん、では行くとするか」

そう言つて雄二と西村先生は食堂を出て行った。

雄二よ、まさか西村先生に明久の事を頼むつもりかの？

秀吉 side out

吉井 side

そして試験召喚戦争が開始してから1時間後

Fクラスは少しずつだがDクラスを押し始めた

このまま行けば、勝てるのではないか？ みんながそう思い始めたときにDクラスが怒涛の反撃をしてきた。まずいな、さっきの猛攻でみんな満身創痍だ。僕も何とかしな  
いと……

ピンポンパンポーン

《連絡致します》

「ん？」この声……須川か？」

僕の隣にいた秀吉が突然聞こえた来た声に反応する。

まさかアイツ、校内放送を使ってどんな情報を流すつもりなのか？

《船越先生、船越先生》

……船越先生か。確かに今、Dクラスは船越先生を呼ぼうとしているから別の場所におびき寄せるのか。うん、須川くんは中々の策士だね!!

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

何……だと？ え、ちよつと待って!? 何でだ！ 何で僕の名前を出すんだ!?

そこは君が自分を犠牲にして僕達を救うんじゃないのかい!?

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

……須川君。君は僕の敵だ。ていうか、船越先生にそんな事言っちゃ駄目だつて!!  
だつてあの先生、婚期を逃したからつて生徒に単位を渡すからつて言つて交際を迫るんだよ!! そんな人にそんな放送しちやったら僕の危機じゃないか!!

「な、なんて奴なんだ!」

「自分を犠牲にしてもFクラスに勝利をもたらそうとしているぞ!!」

「吉井、お前は男の中の男だ!!」

「吉井の犠牲を無駄にするな!! Fクラス、突撃いいいいいい!!!」

「「「「うおおおおおおおおお!!!」」」」

Fクラスの面々が僕に称賛の声を上げる。いやいや!! 僕はそんな指示聞いていない!! 自分を犠牲にするつもりもないから!!

「そ、そんな吉井の奴」

「やだ、カツコイイ」

「わが身を犠牲にして勝たせようとするなんて……男ね」  
「嫌いじゃないわ、嫌いじゃないわ!!」

Dクラスからも僕をたたえる声が聞こえるけど、全然嬉しくないよ!!

え、どうすれば良いの!? 僕どうすれば良いの!?

秀吉「……明久、僕はちよつと放送室に用事が出来たのじや。だから行ってくるの」

吉井「まっつて秀吉!! 今の僕を一人にしないで!!」

秀吉「離すのじゃ!! 須川の奴を倒しに行くのじゃ!!」

吉井「同士討ちしちや駄目だつてば!!」

秀吉「しかしのお!!」

がつしやああああああん!!

そんな風に秀吉と言い争いをしていると突然、窓ガラスが割れた。

な、なんだ!?

「お、おい誰だ! 窓ガラスを割った奴は!!」

「知らねえよ! 突然割れたんだよ!!」

……どうやら、Dクラスの人たちも驚いているみたいだね。じゃあ、誰が?

「……見つけたぞ。《学園の恥》が」

そこに居たのはさつき僕を殴ろうとして平賀君たちに殴られて逃げだしたDクラスの生徒達だった。

「おい、お前ら! 何やってんだよ!?!」

「お前ら、窓ガラス何て割りやがって! こんな話には無いぞ!!」

「そうよ! それに、あんた達は今回の戦争に参加できない筈でしょ!!」

「うるせえ!! お前らは引つ込んでろクズ共が!!」

そいつは、クラスメイトの事をクズ呼ばわりして僕に近づいてきた。

そしてそいつの手には、見覚えの有る物が握られていた。

「さつきは良くも恥をかかせてくれたな。ここでお前をぶっ倒してあとで立花たちもぶっとばしてやる」

「そうだ、俺達をコケにしてくれやがって!!」

「な、なんだ。こいつら!」

「試験召喚戦争中だぞ?! ケンカなんてしてる場合じゃねえだろ!」

秀吉「……明久、あ奴等の持っている物。もしや」

吉井「ああ、……「ロックシード」だ」

「さあ、俺達が手に入れたこの力でお前をぶっ殺してやるよ!!」

不味い!? みんなを避難させないと!!

吉井「みんな! 試験召喚戦争は一時中止だ!! 今すぐここから離れて!!」

「え、なんだよ急に!」

「そ、そうだぞ! まだ決着は「良いから早くするんだ!!」っ!!」

秀吉「Dクラスのみんなもじゃ!! すぐに近くの教室に避難するんじゃ!!」

「な、なんでだ!」

「避難って、そんなことする必要が「今は言う事を聞いて欲しいのじゃ!!」は、はい!!」

「僕と秀吉の警告を受けて一大事だと思ったのか？ 2つのクラスの生徒たちはその場から駆け足で去った。」

「あくあ、せっかくこの《学園の恥》を倒す所を見せてやろうと思ってたのによ」

「まったくだ、だけどこれで心置きなく殺せる。そうだろ？」

「違いねえ!! ぎやはははは!!」

……聞いてるだけで虫唾が走る笑い声をあげる目の前のDクラスの生徒。いや、もはや生徒ではないか。ただの嫉妬心から道を踏み外した奴らだ、だがこうなつた原因は見当はつく。「アイツ等」が原因だろう。

吉井「……一応、聞いておくけど。そのロックシードはどこで手に入れた？」

「ああ!? さっきそこで帽子をかぶつた男に貰つたんだよ!!」

「お前に復讐できる力をくれるってな!!」

秀吉「……明久、まさか」

吉井「……ああ、やつぱり「アイツ等」みたいだね」

秀吉「どうする? ここで戦うのか？」

吉井「……多分、今頃はムツリーニが映像をどうにかしてくれている。それにここで倒さないと、この学園のみんなに危害が及ぶ。それだけは、絶対にさせない!!」

秀吉「……つぶ、そうじゃの。その通りじゃ!!」

秀吉はそう言つて懐から何やら大きい機械を取り出した。  
なんだろう、僕が見た事もない機械だ。

秀吉「明久、恐らくこいつらだけじゃない筈じゃ。他の奴もロックシードを受け取っている可能性が有る。じゃから、ここは儂も任せてもらおう」

吉井「そんな！ 秀吉に危険な真似は「明久!!」

秀吉「儂だつて、いや儂らだつて明久の力になりたいんじゃ！ それを分かってくれ!!」

吉井「秀吉……分かったよ」

秀吉「よし……ムツツリーニ!! 姉上にも伝えて欲しいのじゃ!! 明久が助けてほしいと！ 姉上の力も貸してほしいと言つておると!!」

吉井「ひ、秀吉?! なんてそんな」

秀吉「安心せい、姉上は儂と同じくらい強い。それに、明久と同じじゃ」「なぜなら、儂と姉上も、そして……明久も!」

「仮面ライダーなのじゃから!!」

そんな！ 優子さんも仮面ライダーになつてしまったの!? 君と、優子さんにはこんな世界に来てほしくなかつたのに!!

「もう良いか？ さっさとこの力を試してみたいんでね!!」

そう言ってDクラスの奴はロックシードの錠前を開けた。するとクラックからライオンインベスにビヤッコインベス、それに初級インベス達が飛び出してくる!!

不味い、……仕方ないか!!

吉井「秀吉! 力を貸してくれ!!」

秀吉「勿論じゃ! 行くぞ、明久よ!!」

僕はすぐに隠し持っていた「戦国ドライバー」を腰にセットする!

そしてオレンジロックシードの錠前を開ける。

オレンジ!!

吉井「変身!!」

錠前を開けたオレンジロックシードを戦国ドライバーにセットする。すると戦国ドライバーから法螺貝の音が鳴り始める。

そしてすぐに右側のカッティングブレードでロックシードを開ける!!

ソイヤツ!! オレンジアームズ 花道! オンステージ!!

秀吉もすぐに手に持っている物のスイッチを押す

stand by yes sir!!

スイッチを押してそれをさっきの機械にセットすると待機音声が流れ始める

loading…



すると機械から謎の幽霊みたいなパーカーが飛び出してくる!!

それはしばらく秀吉の周りを守護するかのように回っている

秀吉「変身!!」

秀吉が機械の上のボタンを押すと雫の様に周りに波紋が広がった。

TENGAN Necrom!! MEGA UL ORDER!!

Crash The Invader!!

パーカーが秀吉の上にかぶさるとそこには緑色の「仮面ライダー」が立って居た。

「な、なんなんだよ。その姿は!!」

「お前らは一体何なんだ!!」

Dクラスの奴らは僕らの変身を見て驚いているようだ。それじゃあ教えてあげよう、

僕たちは!!

吉井「僕は【仮面ライダー鎧武!!】」

秀吉「僕は【仮面ライダーネクロム】じゃ!!」

吉井「さあ、ここからは俺のステージだ!!」

秀吉「心の叫びを、聞け!!」

さあ、いつもの「厄介ごと」を片づけるとしますか!!

### 3話 仮面ライダーとは何者なのか

吉井「ここからは俺達のステージだ!!」

秀吉「心の叫びを、聞け!!」

さあ、いつもの「厄介ごと」を片づけるとしますか!!

まずは簡単に片を付けられそうな初級インベスから!!

吉井「秀吉! あの前級インベスを先に倒すよ!!」

秀吉「うむ! 任せておけ!!」

ネクロムとなった秀吉と鎧武になった僕は初級インベスを倒すために行動を開始する。

「そう簡単に行くと思ってんじゃねえぞ!!」

「やっちまえ! インベス!!」

Dクラスの奴らは初級インベスを使役してこつちに攻撃を仕掛けてくる。

……違う、そいつらはお前らが使役していいような奴らじゃない!! そもそも、インベスなんて人間が使役できるものじゃないんだ!!

吉井「お前たち!! インベスはお前たちが扱えるものじゃない!! 今すぐに戻せ!!」

「バーカ！ 誰かテメエなんか言われてはいそうですかって戻すかよ!!」

僕の警告も無視してDクラスの奴らはインベスを使って攻撃してくる。

こいつら、こつちの気も知らないで!! でも、初級インベス如きだったら僕一人でも

.....

「そいつらばかりにかまけていて良いのかな!？」

秀吉 「明久!」

吉井 「はっ!? ぐわあっ!!」

油断していた僕の背後からビヤッコインベスの鉤爪攻撃が当たってしまった。

それを受けて僕の動きは少し遅くなってしまう。その隙についてもう一体のライオンインベスも攻撃してくる。

吉井 「ぐあああ!!」

秀吉 「明久!! つく、邪魔なのじゃ!!」

秀吉も初級インベスを相手にしてこつちに来れそうにない。ここはこの2体が僕が相手にしないと……今のこいつらは、僕を倒しても他のクラスの人たちに手を出さねない、それだけは阻止しないと!!

「ほらほら、さっきまでの勢いはどうしたんだ!？」

「これが俺達に舐めた事した報いだ!!」

「いい気味だなあ!? ええ、おい!!」

Dクラスの奴らの罵声も聞こえない、こいつらの相手は厄介なんだ。そつちに注意を向けている暇なんて無い。

秀吉「邪魔だと、言っておるのじゃあああああ!!!」

Destroy

Daitengan

Necrom

O

MEGA UL ORDER!!

秀吉がああ機械のスイッチを押すと、秀吉の腕から緑色の光弾が初級インベスを撃ち抜いて倒して見せた。

凄い、秀吉にあんな力が有ったのか。

「な、おい! インベスがやられちゃったぞ!!」

「心配するな!! 所詮アイツ等は時間稼ぎだ!!」

「それにこつちにはまだ上級インベスも残っている!」

吉井「その自信……今ここで壊してあげるよ!!」

僕はそう言つてアームズウエポンでライオンインベスとビヤッコインベスを斬り付ける。

それに怯んだ隙について、僕はライオンインベスの顔にめがけて無双セイバーの引き金を引く。そこから銃弾を8発撃ち込んですぐにリロードしてビヤッコインベスにも

発砲する。

それを受けて2体は少し僕と距離を取ろうとする。しかし、それを許さないのがDク  
ラスの奴らだ。

「おい、何距離を取ってんだよ!!」

「あんな奴等を相手に逃げようなんて考えてんじゃねえ!!」

秀吉「バカ者どもめ、戦局が分かかっていないようじゃな」

ああ、まったくもってその通りだ。あれくらい、誰だつてとる行為だ。それも分から  
ないくらいに、彼らの頭には血が上っているようだ。それじゃあ、何時までもこうして  
いられないしケリを付けなければ。

吉井「とどめ、行くよ。秀吉!!」

秀吉「うむ! 任せっておけ!!」

僕は無双セイバーの底にアームズウエポンを取り付けて無双セイバーをナギナタ  
モードにチェンジして、オレンジロックシードをセットする。

ロック、オン!!      オレンジ      チャージ!!

その音声を聞くと同時に僕は無双セイバーを思いつきり2回振る。すると、そこから  
オレンジ色の斬撃が2つずつライオンインベスとピヤッコインベスに向かって行く。

その斬撃は2体にあたるとオレンジのような形となつて包み込む。

包み込まれた2体は動けないのかそのまま静止している。

それを見たDクラスの奴らは慌てたようにロックシールドを閉じるが2体のインベスはクラックにも戻れないようだった。

Destroy!!

Daitengan

Necrom

OMEGA UL ORDER!!

秀吉も再びボタンを押して先ほどの光弾を自分の足に纏わせる。

僕は無双セイバーを構えてライオンインベスに向かって走る。

そして、そのままジャツコインベスを真つ二つに切り裂く!!

秀吉もライオンインベスに向かってライダーキックを放つ!!

その必殺技を受けて2体のインベスは爆発して消え去った。

「ば、化け物だ!!」

「ここ、こんな奴らに勝てる訳ねえ!!」

「逃げるぞ!!」

僕たちの戦いを見て恐れをなしたのか、Dクラスの奴らは我先にと逃げだしていった。

これでアイツ等も、自分がどんなものに手を出したのか。どんな相手にケンカを売ってしまったのかを理解してくれるといいんだけどなあ。

秀吉「……追わなくて良いのか？」

吉井「良いよ、彼らのクラスの責任は彼が果たしてくれるよ」

秀吉「彼？ 彼つて一体誰じゃ？」

吉井「そこは良いじゃないか。さ、これからどうしようつか？ 試験召喚戦争の続き

は出来るかな？」

秀吉「うゝむ、少し難しい気がするのう」

吉井「だよねえゝああ、雄二になんて言えば良いんだらう」

僕たちはこれを雄二に報告するために一旦Fクラスに戻ることにした

吉井 side out

??? side

さて、あの大馬鹿野郎たちは絶対にこつちを通るだろう。ここでこいつと一緒に待っているとな案の定、アイツ等がここに来た。

俺達の友人である吉井に手を出そうとした不屈き者ども。そんな奴らに俺とこいつが容赦をするわけが無い。それに俺は教室でも言った筈だ。吉井には手を出さなつてな？

「お、お前は!!」

「立花!! なんでこんな所に!!」

「そ、それに隣に居るのって……Aクラスの木下優子じゃないか!」

優子「……気安く私の名前を呼ばないでくれないかしら? 虫唾が走るわ」

立花「ああ、全く持ってその通りだ。テメエ等みたいな奴等に名前を呼ばれるなんて吐き気がするよ」

「な、なんだとお!!」

「お前も、俺達をバカにするのか!」

優子「バカじゃなかったら何なのかしら?」

立花「どうでも良い、で? 言いたいことはそれだけか?」

「ま、まだまだ!! まだ俺達にはこいつが有る!!」

「さつきはアイツ等に使う前だったし、せっかくだお前らに使わせてもらおうぜ!!」

さつきまでのビクビクした感じが無くなった。あの感じ……なるほど、ロックシードだけじゃなくてアイツ等「欲望のメダル」まで入れられたか。

その証拠にあいつらの体からメダルがあふれてクズヤミーが出来上がってきた。

つたく、なんでこいつらはこうも面倒事をこの学園に持ち込んでくるんだ? 明久の努力を無駄にするようなことしやがって!!

立花「木下、行けるか?」

優子「誰に聞いているのかしら? そんなもの、聞くまでもないでしょ?」



立花「……そうだったな。お前は、アイツ等を捕まえてくれ」

優子「了解、それじゃあヤミーの方はそっちに任せるわ」

俺と優子は各自、変身ベルトを腰に当てる。

俺はバナナロックシードの錠前を開けて手元で回転させた後ドライバーに装着し、カッティングブレードをおろして変身する。

優子は、バイクのミニカーをマツハドライバ―炎にセットする

カモン！ バナナアームズ！！ ナイト・オブ・スピアア―！！

立花「変身！！」

シグナルバイク！ ライダー！！ マツハ！！

優子「Let、s 変身！！」

俺の頭上に現れたバナナはそのまま俺の頭に突き刺さり、そのままアーマーとなつて俺の全身を包み込む。

優子も腕を回して変身ポーズを決めると、全身が真っ白な仮面ライダーに変身する。

「おい、何だあのバナナ！！」

「え！？バナナ！？バナ、バナナ！？」

立花「バナナじゃない！ 仮面ライダーバロンだ！！」

優子「追跡、撲滅、いずれも……マツハ！！ 仮面ライダー……マツハ！！」

「え、なんであんなハイテンションなの？」

「木下ってあんなにテンション高くなるんだな」

優子「違うわよ！ こういう名乗りをしないとイケないだけだから!!」

立花「良いから！ 早くアイツ等とっ捕まえるぞ!!」

優子「あんたに言われるまでもないわ！」

優子はそう言っつてベルトに入れたシグナルバイクを変える。

シグナル交換！ トマーレ

優子「さあ、あんた達は止まってしまいなさい!!」

優子はそう言っつて「ゼンリンシューター」からシグナルトマーレの光弾をあのカカ共に向けて放つ。

その光弾はアイツ等に当たるとそのままアイツ等の動きを止めた。

優子「それじゃあ、こいつらを西村先生に突き出してくるわ」

立花「ああ、それじゃあそっちは頼んだ。こっちはこいつを片づける」

優子がアイツ等連れて行く間にも俺は目の前のヤミーを倒すことに集中している。

見た感じだと、クズヤミーっぽいな。このままバナナで押し切るか。

立花「悪いが、お前みたいのにつまずいていられないんでな!!」

俺はクズヤミーに向けてナイトオブスピアを突きつけて攻撃する。

クズヤミーは防御力は普通の奴らよりも少しだけ有る。だが、こいつは見た感じではそいつらよりはまだ力も付いていないし、防御力も低いと判断してバナナで攻撃を続ける。そうしていくと、クズヤミーも段々とだが動きが鈍くなっていく。

このまま一気に押し切るとするか！

俺は戦国ドライバーのブレードを2回倒して必殺技を放つ。

バナナスパーキング!!

ナイトオブスピアーにバナナ状のオーラを纏わせてそのままクズヤミーを切り裂く。切り裂かれたクズヤミーはセルメダルをまき散らしながら消滅した。

このセルメダルは全部回収してアイツ等に渡すしかないな。

そう思った俺は、そのままセルメダルの回収を始める。

立花 side out

雄二 side e

平賀「……うん、事情は大体吉井から聞いたよ」

雄二「そうか、それじゃあ今回の試験召喚戦争の再戦はどうする?」

平賀「いや、この試験召喚戦争は僕たちの敗北で良い」

雄二「なぜだ? まだ、代表は討ち取られていないんだぞ?」

俺の疑問に平賀はため息をつきながら答える。

というか、平賀は俺が分かかっていて聞いて聞いているのに気が付いているな。

平賀「こつちの数名の暴走で吉井達だけじゃなくてDクラスとFクラスの両生徒を危険にさらしたんだ。それへの謝罪を込めてこの試験召喚戦争は俺達の敗戦って訳だ」

雄二「……そうか、まあこつちとしては有難い」

平賀「それと、吉井達に伝えておいてくれ。「迷惑をかけてすまなかった」と」

雄二「別にあいつは迷惑だとは思っていないと思うがな？」

平賀「それでもさ。俺も責任は感じているんだ」

雄二「分かった。それで戦後対談なんだが」

平賀「ああ、条件は何だ？」

雄二「ああ、普通だったらDクラスとFクラスの設備入れ替えと3カ月間の試験召喚戦争の禁止なんだが、これを無しにして俺達Fクラスに協力するだけで良い」

平賀「……それだけで良いのか？」

雄二「ああ、たったそれだけで良い」

俺のその発言を受けて平賀は少し考えて返事をする。

平賀「ああ、俺達はFクラスの条件で戦後対談を受ける」

そう言つて平賀は手を出してくる。俺もその手を掴んでDクラスVS Fクラスの試験召喚戦争の戦後対談は終了した。

平賀は握手を終えると、そのまま教室を出て行った。恐らく、生徒指導室に向かったのだらう。今回の事件を起こした奴らにお灸をすえるために。まあ、そいつらはご愁傷さまとしか言えないな。

雄二「さて、思わぬ形で決着が付いちまったがこのまま進めていくとするか」  
俺のその呟きは誰にも聞かれることは無かった。

### 3. 5話 戦いの中、何が有ったのか

島田 side

ようやく始まった試験召喚戦争！ ここで活躍すれば吉井の奴も私の事を見直すでしょう。

私だって、やればできるのよ。……それにしても、吉井の奴は何処に行つたのよ？

須川「つく、島田！ ここは任せた」

島田「ちよつと、あんたは何処に行くのよ!？」

須川「Dクラスの奴等、船越先生を呼ぶって言つて走つていったんだ。だから俺は、それを阻止する！」

島田「阻止するって、どうするのよ!？」

須川「それは考えが有る。俺に任せてくれ!!」

島田「……分かつたわ！ お願いな!!」

私は須川を行かせて、残っているFクラスのメンバーに指示を出す。

島田「みんな、今須川が作戦行動のために一時離脱したけど私達もそれまで持ちこたえるの!!」

「分かってる!!」

「任せておけ!!」

島田「FクラスはDクラスを囲んで多対一の状況に持ち込んで！ 一対一にならないように注意しなさい!!」

「「「「了解!!」」」」

よし！ こっちは中々の士気がまだ有るみたいね。この調子でガンガン行っちゃいましょう!!

「そ、そこに居るのは島田お姉様じゃ有りませんか!？」

島田「げっ、この声は……」

清水「お姉様あああああああああ!!!! 美春はお会いしとうございましたあああああ

!!!!」

島田「美春!! こっちに来ないでよ!!」

清水「嫌です！ お姉様は私と一緒に愛し合ってください!!」

人が良い感じに頑張っていたのになんでここで美春に見つかっちゃうのよ。というか、美春もDクラスだったの!? なんて面倒臭い

島田「仕方ない！ Fクラス島田美波！ 数学で……」

ピンポンパンポン

《連絡致します》

え、放送？　なんで……あ、須川の作戦ね!!

こないいいタイミングで放送をかけるなんて、一体どういう放送を……

《船越先生、船越先生》

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

……ん？　吉井が体育館裏で待っている？　え、どういう事？

なんでアイツが体育館裏で船越先生を待っているのよ？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

………吉井、あんた。私より、船越先生が良いって言うの!?

そんなの信じられない!!　というか、試験召喚戦争中になにを話そうとしているのよ

!!　あいつ、絶対に許さない!!　後で会ったら腕の関節を曲げてやる!!

「吉井、お前って奴は……」

「ああ、あいつの犠牲は無駄にはしない!!」

「総員！　吉井が開いてくれた活路を使って逆転するぞ!!」

「「「うおおおおおおお!!!」」」

何やらFクラスのメンバーが騒がしいがどうしたんだろう？　って、何を勝手に進撃しているの!?!　さっきの私の指示を無視して!!　そんなんじや、すぐにやられちゃうじや



ない!!

「くっ、こいつら一気に!!」

清水「怯むな! 相手は所詮Fクラス!! 数もまだこちらが有利です!!」

「そうは言っても……うわあ!!」

「加藤君! 清水さん、加藤君が戦死しました!!」

清水「そ、そんな! じ、陣形を組みなおします!! 急いで!!」

「間に合わん!! こころは一時撤退だ!!」

清水「そんな! 目の前に愛しのお姉様がいるのに!!」

「清水!! こころで部隊を全滅させる気か!!」

あ、あれ? FクラスのがDクラスを押ししてる?

あ、でもこの隙に私も……

島田「わ、私も戦「全員今すぐに避難しなさい!!」え?」

突然そう聞こえてきた声に思わず動きが止まってしまう。そしてそれは私だけじゃ無かった。その場にいるFクラスとDクラスの面々の動きも止まっていた。

そこに現れたのは、学年主任の高橋先生だった。なんで、いきなり避難しなさいなんて……

島田「あ、あの高橋先生? なんで、避難なんて……」

高橋「校内に不審人物が侵入したとの報告が入りました。生徒は速やかに近くの教室に避難してください」

「ふ、不審人物が侵入？」

「それだけで試験召喚戦争を中止にするのかよ？」

「納得できません！」

高橋「……あなた達は、その不審人物が危険物を持っていると考えられないんですか？」

高橋先生のその一言で私達は事の重大さを理解した。そして先生の指示に従ってすぐに近くの教室に避難を開始する。

島田「あ、あの！ 吉井は……」

高橋「吉井君は大丈夫です。そちらには西村先生が向かいました」

私の質問に高橋先生はそう答えてくれた。まあ、西村先生がいるのだったら安心できる。あの人に勝てる人物なんて早々お目にはかかれない。少し不安が薄れた私は、そのままみんなと教室まで行った。

島田 side out

優子 side

優子「……」

土屋「……これが、秀吉からの伝言。後は任せられるか？」

優子「ええ、大丈夫よ。わざわざ連絡、ありがとう」

土屋「気にするな、俺は俺の仕事をしただけだ」

そう言つて土屋君からの電話は切れた。内容は、明久君がDクラスのバカが放つたインベスに襲われてピンチだと言う事と私に助けを求めてくれたと言う事。まあ、殆ど秀吉が強制的に言つたようなものだけど。それでも、明久君の力になれる。それだけで十分だった。

優子「待っていて、明久君！」

「おっと、待つた優子」

明久君の元に向かおうとした私は、後ろから声をかけられて思わず足を止める。

こっちは急いでいるのに！ 一体誰よ!!

優子「つて愛子じゃない。なに？ 私、急いで行かないといけないんだけど」

愛子「ま〜ま〜慌てない慌てない！ 慌てたつて何も出来ないよ？」

優子「……本当に、一体何なのよ？」

私を呼び止めたのは私のマツハドライバーを作ってくれたクリムさんの一人娘の工藤愛子だった。

愛子「優子、あなたはそつちに行かないでそのDクラスの奴らが逃げそうなところに

行くべきじゃないかな？」

優子「……なんで、愛子が私と土屋の会話を聞いているのかしら？」

愛子「いや、それはほら、「偶然」聞こえちゃっただけだよ」

どうせ、盗み聞きでもしたんだろう。でも、今はそんなことを追求する気もない。それよりも……

優子「Dクラスの奴らが逃げそうなどころって何処よ？」

「それだったら心当たりが有るぜ？」

愛子「あら？ 結構速いご到着だね」

今度は誰よ。まったく次から次に

優子「立花君じゃない。なんでここに？」

立花「お前と同じだ、土屋からの電話を受けて木下と協力してほしいと」

土屋君……立花君にまで声をかけていたのね。でも、それは有難い。こういう状況では味方は1人でも多いほうが都合が良いからね

優子「あなたと協力するのは良いけど、そいつらがどこに逃げるか分かるの？」

立花「ああ、目星も付いている。そこで張り込む」

愛子「それに、もし外れてもこの子達にお任せ☆」

愛子はそう言って指をパチンと鳴らす。するとどこからともなく大量のミニカーが

やってくる。これは、クリムさんが発明したシフトカーだ。私のシグナルバイクもクリムさんが作ってくれたものだ。

愛子「私がここで、このシフトカーたちが集めてくる情報を2人に伝えるから。もし、立花君の目星が外れた場合はこの子達で足止めも出来る。」

立花「なるほどな、それは便利だ」

優子「シフトカーさん、お願いできるかしら？」

私の質問にシフトカー達は応えるようにクラクションなどを鳴らして返事をする。

その光景は何度見ても可愛く見える

愛子「ほら、この子達も頑張るって！ だから私も協力するよ」

優子「愛子……あなた、まさか最初から」

私の疑問を口にする前に愛子は人差し指を私の口に当てる。そして悪戯が成功した子供のような笑顔で言った

愛子「友達の事だもん。何にも言わなくてもわかるし、何も言わなくても助けたくなくなるものだよ」

愛子、あなたって子は。って感動している場合じゃない、私も立花君も急いでその場所に行かないと

愛子「優子、あんまり無理をしないで。マツハのシステムだって優子はまだ完璧には

使いこなせていんだから」

優子「ええ、分かっているわ。無茶はしない」

そうだ、いくら力が有るからってまだ殆ど使った事が無いのだからそれが普通なんだ。でも、こんな私でも少しで良いから役に……

立花「少しでもいいから役に立ちたい、その気持ちだけあれば大丈夫だ。ほら、行くぞ！」

立花君に腕を引つ張られる形で私は思考の海から強制的に引き戻された。つてあ、足早！ ちょ、こけるこける!!

優子「ちよつ！ こけるから！ 自分で走れるからあ!!!!」

私の叫びは果たして立花君に届いたかなあ？

優子 side out

雄二 side

雄二「……そうか、明久と秀吉が対処したか」

土屋「ああ、2人はインベスを撃破後、近くの教室に避難した奴らと一緒にいるらしい」

雄二「……そのインベス呼び出したバカ共は？」

土屋「木下姉の手によって西村先生に引き渡されて現在は生徒指導室に」

雄二「……そうか、報告ありがとう」

土屋「それと、明久から伝言」

雄二「伝言だと？　どんなものだ」

土屋「……『雄二、Dクラスの奴等に責任は無い。今回の窓ガラス破壊は僕が起こしたつて事で報告するよ』だそうだ」

雄二「あのバカは……何でそうも自分から犠牲になりに行くんだ!？」

土屋から聞いた伝言で俺は頭を抱える。なんだつて明久の奴はこんな事態を引き起こしたDクラスの奴の責任まで負おうとしているんだ!？」

お人よしなんてものじゃない、これじゃあまるで……

土屋「あいつは……他人のために自分の命を捨てられる。バカだ」

雄二「ああ、バカ過ぎて……心配になるから目が離せないんだよ」

俺は頭をかいて席を立つ。向かう先はDクラスの代表が居る教室だ。

俺が立ち上がったのを見て、Fクラスの何人かも付いて来ようとしたがそれを俺は手で制した。これは、俺達代表だけで話をしないといけないことだからな。

雄二「俺は今からDクラスの代表に、今回の試験召喚戦争をどうするか。話し合ってくる。それまで残りのFクラスのメンバーはここで待機!!　良いな」

「あ、ああ分かった」

「頑張つて来いよ、坂本!!」

雄二「ああ、任せておけ」

俺はそれだけ言つてFクラスの教室を出て行く。途中でなにやら島田が明久がどうたらこうたらと喚いていたが、あいつに手を出そうものなら秀吉が黙っていないから俺はそのまま無視してDクラスに向かう。面倒臭い話し合いの時間だ……

雄二 side out



## 4話 戦後の彼らは何を思うのか

吉井 side

さて、Dクラスとの試験召喚戦争も終わったみたいだしこの後はどうしようかな  
……なんてね。もうすることは決まっているんだ。まずはお礼を言いに行かないと  
ね。

僕が逃がしちやつたDクラスの奴等を捕まえたのは優子さんと立花君だって、さつき  
雄二から聞いたからね。

それに……優子さんと秀吉がなんで仮面ライダーになっちゃつたのか聞かないと。

吉井「……そうこうしている間にAクラスの前についたか」

「あれ？ 吉井君じゃない？ どうしたの？」

吉井「ん？ あ、工藤さん？」

愛子「どうしたの？ こんな所に」

吉井「あ、いや、今Aクラスに優子さんっているかな？」

愛子「ん？ 多分いるんじゃないかな？ さつき僕がトイレに行く前は秀吉君と話  
していたし」

吉井「秀吉と? ……じゃあ、丁度良いか」

愛子「何が丁度いいの?」

吉井「何でもない、こっちの話だよ」

愛子「そっか、それよりも入らないの?」

吉井「入っても良いのかな?」

愛子「遠慮なんてしない! ほくら、早く」

工藤さんに手をグイグイ引つ張られて僕はAクラスに入った。Aクラスの内装は、初日に見ていたけどやっぱり凄い。なんで教室にドリンクバーとか有るの? 僕、毎日飲む自信が有るよ。イスがリクライニングシートって、授業を受けずに眠る自信があるね。

……つて、前までの僕だったらそうだけど今の僕はそんな物に負けるわけが無い。

……そう、思いたい。いや、思わせてくださいお願いします。

久保「あれ? 吉井君じゃないか」

吉井「やあ、久保君。元気そうだね」

彼は久保利光。僕の友人にして僕が困ったときに助けてくれる良い人だ。

彼には前に召喚獣用のロックシードを作って貰った事が有るから、それのお礼も言わないとな。

吉井「久保君、君が作ってくれたあの召喚獣用のロックシード。良く使わせて貰っているよ。ありがとう!!」

久保「い、いや! 喜んでももらえているのなら製作者としても本望さ!!」

久保君は僕がお礼を言うのと、とても嬉しそうに笑ってくれる。

本当に、彼と言い秀吉たちと言い僕はみんなに助けられっぱなしだ。

久保「それで、吉井君はAクラスに何の用だい?」

吉井「うん、実はね……優子さんいらないかな?」

僕の質問にキョトンとした久保君だったが、なにやら段々とニヤニヤとした顔になってくる。どうしたんだろう? 僕は何か可笑しなことでも聞いたかな?

吉井「あの、久保君? なんでそんな風に笑っているの?」

久保「あ、ああすまない。君が優子君に用事と聞いてね。……遂に優子君も報われたか?」

吉井「報われた? ……いや、さつき優子さんに助けてもらったからそのお礼に来ただけなんだけど」

僕その言葉を聞いて。久保君は何やら可哀そうな顔をした。さつきから久保君の顔が変わりすぎてビックリしているんだけど。その怪物くん並の顔変化は一体どうやっているのやら。

久保「うん……優子君。頑張りたまえ、僕は応援しているぞ」

吉井「それで、優子さん観てない？」

久保「優子さんだったら、あそこに座っているよ」

久保君は窓際の席を指さしてくれる。そこには、窓の外を眺めて頬に手を当てている優子さんの姿が有った。その姿は、さながら絵画の一場面のような美しさがあつて僕的心が洗われて行くような気すらする。つまり、何が言いたいかつて言う、物凄く可愛い！ 何あれ、天使か！ 女神か!? 何なんだ!?

秀吉「む、姉上。明久が来たぞ」

優子さんの前の机に座っていた秀吉が優子さんに声をかける。それが聞こえていないのか未だにブーツとしてゐる。何が有ったんだろう？

秀吉「はあくこれはダメじゃな。考え事しているとヒトの声などが聞こえず、話かけられている内容も頭の中へ入って行かない。これをどうにかするには……」

秀吉は何やら僕の事をじつと見てくるけど、僕が声をかけたって同じことになる未来しか見えないんだけど？ え、やったほうが良いの？ なんか、秀吉が視線で「この姉上をどうか頼む」みたいな事を送ってきている気がする。

吉井「あくえくつと、秀吉。優子さん、今話は大丈夫？」

秀吉「わしは大丈夫なのじゃが、姉上が……」

吉井「……よし、任せて」

秀吉「うん？ 任せるとはいったい何を……ッ!」

優子「秀吉？ あなたさつきからうる「優子さん」え？」

僕は後ろから優子さんは包み込むように抱く。こうでもしないとこつちに気が付かないんだよね、優子さん。とは言つても、好きでもない相手にいきなりこんなことをされたらいやに決まっている。なので、すぐに謝らないと

吉井「ごめん、でもこうでもしないと優子さんが聞いてくれそうになかったから」

優子「……」

吉井「でも、これでやつとお話してできるね」

優子「……」

吉井「……優子さん？ だ、大丈夫？」

僕がまた呼び掛けてみると、優子さんは顔を真っ赤にして機能停止していた。あ、あれ？ いきなりこんな事をされて怒りのあまりに機能停止しちゃったのかな？

ど、どうしよう!! 謝って許してくれるのか物凄く不安だよ!!

秀吉「明久よ、先ほどの行動はどういう事が説明してほしいのじゃ？」

吉井「あの、秀吉？ 話すのは良いんだけど、目が全然笑ってないんだけど？」

秀吉「気のせいじゃ」

吉井「いやでも目「気のせいじゃ」

吉井「い、いや」

秀吉「まあ、これについては後で詳しく聞くとして……なぜ、明久もAクラスにきておるのかの？」

吉井「それは……優子さんにお礼と聞きたいことがあつて」

秀吉「……なるほどのお、明久がここに来た理由は大体分かった」

う強いですね!! ようやく聞きたいことが聞けそうだと  
う強いですね!! ようやく聞きたいことが聞けそうだと  
う強いですね!! ようやく聞きたいことが聞けそうだと

吉井 side out

秀吉 side

吉井「それで、ここからが本題なんだけど」

秀吉「みなまで言うな。これの事じゃろ？」

明久が聞こうとしてしていることは分かっていた。姉上と儂のこの力。「仮面ライダー」へと変身するこの力が何なのかを聞くためじゃろう？

優子「秀吉の力については、私は詳しくは知らないわ。でも、私のこの「仮面ライダーマツハ」に変身できるシステムを作ったのは……」

愛子「僕のお父さんでもある、クリム・スタインベルトのお蔭って事!!」

儂と姉上、そして明久の会話に愛子が入ってくる。まあ、製作者じやからこの会話に入る権利くらいは有るじやろう。

吉井「工藤さんのお父さんが作った?」

愛子「うん、僕のお父さんが吉井君のサポート……が本当の目的じゃないけど当分はそう言った方面での使用のために僕と一緒に作ってくれたのが優子に変身する「仮面ライダーマツハ」システムの【マツハドライバー炎】」

吉井「マツハドライバー炎……」

愛子「そしてこれが……」

工藤が指を鳴らすと工藤の周りに道路が動き始めてそこをミニカーたちが颯爽と走ってくる。その内、赤いスポーツカーのミニカーを手に持った工藤。あのミニカー、可愛いから一つ位貰えない物かろう?

愛子「僕が「仮面ライダードライブ」に変身するために必要な「シフトカー」達だよ!」

なんと!?! 工藤が前に言っていた「ドライブシステム」はもう完成しておったのか!

吉井「え? 工藤さんも……「仮面ライダー」?」

愛子「そうだよ、「仮面ライダードライブ」。まあ、優子の相棒ポジかな?」

優子「そういう事よ……明久君。あなたが私を認めてくれなくても、もう私は大丈夫」

姉上よ、明久は姉上を認めなかったんじゃないのじゃ。姉上の事が心配で、わざと突き放すような態度を取って姉上に「普通の学園生活」を送ってほしかったんじゃない。まあ、儂もその願いを裏切って変身したのじゃから、人の事は言えないのじゃが。

吉井「認めなかつたんじゃないんだ、ただ優子さんが、危険な目に遭うのが……嫌だったんだ」

優子「……」

吉井「前みたいに、僕が不甲斐ないせいで優子さんを危険な目に遭わせてしまうかもしれない。そう思って「吉井君」

優子「……私は、そんなの気にしない。だって、私は」

優子「あなたにこの命を助けられた時から！ あなたの事が好きで、あなたの役に立ちたいと思っていたのだから!!」

……あ、姉上？ いきなりなんて大胆な告白をしておるのじゃ!! って、違う!!  
なんてタイミングで明久に告白をするのじゃ!! 儂だって明久に……

優子「……あ」

姉上も自分が何を口走ったのか理解したのか、一瞬で顔がゆでだこの様に真っ赤になつて頭から煙を出して固まってしまった。あくこれは元に戻るのに、また相当時間がかかるじやろうなあ。



愛子「わく優子ったら大胆く!! こんな所で告白するなんて!!」

工藤はとて面白い物を見たと言わんばかりにニヤニヤと笑い、儂は呆然とし、明久は白目をむいて直立不動に。そして、丁度近くにいた霧島と久保もニヤニヤとした顔で明久と姉上を見ておる。

……何なのじゃ? この状況は

もう、儂には理解できぬのじゃ。

秀吉 side out

吉井 side

あれから僕はすぐに意識を取り戻してさつき優子さんから言われたことについて考えていた。もう、あの告白のお蔭か、優子さんがなんで「仮面ライダー」になつてしまつたのかが痛いほど分かつた。優子さんが僕をそこまで思つてくれていたのは正直、予想外だつた。

吉井「えつと、優子さんの気持ちは分かつたんだけどなんで秀吉や工藤さんまで「仮面ライダー」になつたの?」

僕の疑問に秀吉は「理由は姉上と同じじゃ」と答えてくれた。姉妹揃つて、こんな僕の為に危険な事になるときに……本当にこの姉妹は強いと思つたんだ。

で、工藤さんは「お父さんが作つたシステムの実験に志願したんだ。君たちと同じで

誰かを守りたいって思いでね」だそうだ。こう言つては失礼だろうが、正直意外だった。工藤さんは、そういう事に興味が無い人だと思つていたから。

愛子「心外だなあ、僕だつてそういう思いはあるよ？」

翔子「そう、それに……そう思っているのは優子や愛子達だけじゃない」

久保「僕達だつて、君たちの役に立ちたいって思いは有るんだよ？」

久保君や霧島さんも僕にそう言つてくれた。嬉しかった、こんな風に思つてくれてい  
る人が居たのに気が付かなかつたなんてやっぱ僕はバカみたいだ。

これからは、もっと彼らの為に、そして期待にこたえられるように頑張らなと！

翔子「それに私たちも愛子のお父さんと協力して」

久保「特別なものを制作中だからね。楽しみにしていてくれたまえ」

特別な物？ 一体何を作っているんだらう。少し気になつてしまふな。でも、そろそろ下校時刻だし今日の所は帰るか。

吉井「随分と長い時間お邪魔しちやつたね。僕と秀吉はこのまま帰るよ」

翔子「また来てね、吉井、秀吉」

久保「僕たちは君たちをいつでも歓迎するよ」

愛子「まったね」

優子「……／／／」

あ、優子さんが顔を背けながらも手を振ってくれた。それに対して僕も手を振り返す。秀吉がその様子をなにやら呆れたように見ていたが、一体どうしたんだろう？

これで、優子さん達に聞きたかったことは聞けた。明日からは……Dクラスの奴にロツクシードを渡した奴について調査しないといけないな。

ああ、また忙しくなりそうだな。僕は心の中でため息をつきながら秀吉と一緒に、家に帰っていった。

## 5話 再会した彼らは何を思うのか

吉井 side

Dクラスとの試験召喚戦争が終結して1日が経った。あの時に、Dクラスの奴等が持っていたロックシードの情報を手に入れたかったけどアイツ等が口を割る訳もなく。結局は何も分からずじまいだった。

……まあ、これは僕の予想だけど今回の件には「あの男たち」が関わっている可能性が一番高い。

吉井「……許せないな」

僕が愛している文月学園に迷惑をかけようとしただけではなく、僕のクラスメイトや他の人たちにも危害を加えようとしたことが一番許せない。

「そんな怖い顔して一体どうしたんだよ？」 吉井

吉井「ん？ ああ、お久しぶりですね」

僕の後から突然声をかけられたけど、この声は聞き覚えが有ったからすぐに振り返る。すると、そこにはやつぱり僕の予想通りの人物が立って居た。

吉井「初瀬さん！ こんな時間に会うなんて奇遇ですね」

初瀬「ああ、偶には早く起きてみるのも悪くはねえな」

この人は初瀬亮二。僕の近所に住むお兄さんだ。彼はこの付近にある大学に通っていて僕と会う事もあんまり無いんだけど今日は珍しく会えた。

吉井「あ、そうだ。初瀬さん！ 例のバイトはどうですか？」

初瀬「ああ、まあ、頑張つてはいるよ」

僕の質問に初瀬さんはバツが悪そうに頬を掻きながら答えてくれる。どうしてそんな顔をしているんだろ？ まさか、バイトが上手くいっていないのかな？

吉井「もしかして、バイトが上手くいっていないんですか？」

初瀬「ああ、いや、上手くはいつているんだがな」

うん？ 上手くいつているならば何でそんな顔をするんだらう？

まさか、自分には似合わないと思つているのかな？ まったく、初瀬さんは!!

吉井「初瀬さん、もしかして「あの恰好は自分には似合つていない」つて考えていますか？」

初瀬「だつて吉井よお、俺みたいな奴があんな「執事服」みたいなもの着たつて誰も喜ばねえつて」

吉井「なんでそう思つちゃうんですかねえ」

本当に不思議だ、初瀬さんは何で自分の事を良く分かつていないんだらう？ 鏡とか見

ないのかな？ だって、物凄くワイルドでカッコイイのに。

「初瀬ちゃん!!」

初瀬「ん？ あ、やばっ!!」

吉井「あれ？ あれって……」

何やら遠くの方から1人の男性がこっちに走ってくる。

まあ、初瀬さんを初瀬ちゃんと呼ぶ時点で誰かは予想は出来ているんだけどね

城乃内「もう！ 初瀬ちゃん!! 何で先に行っちゃうかな?」

初瀬「あく悪い！ すっかり忘れていたよ!! すまん、城乃内」

吉井「あ、ははは。相変わらずですね、城乃内さん」

肩で息をしながら初瀬さんに対して怒るのは初瀬さんの相棒の城乃内秀保さん。

何でも、前までは別々のダンスチームを率いていたらしいけど現在は信頼できる人た

ちにチームを任せて働きたそうだ。

で、初瀬さんが城乃内さんが前から働いていた場所を紹介してもらって働いているら

しいんだけど……

吉井「あのう城乃内さん？」

城乃内「ん？ 何だい、明久君？」

吉井「初瀬さんが何であんなにも自分が働くときに着る服が似合っていないと思っ

いるんですか？」

僕の質問に城乃内さんも分からないのか、無言で首を振ってくる。

城乃内「俺も気になっていたんだけどさ。これが良く分からないだよ。店長の風蓮さんも「せっかくのイケメンが勿体ないわ」って言ってるさ」

吉井「そうなんですか……相棒である城乃内分からないんじゃない僕も分かりそうにないなあ」

そんな風に会話しながら僕は、携帯で時間を確認してみた。

……つげ!? もうそろそろ行かないと不味い時間だ!!

吉井「初瀬さん!! 城乃内さん!! 僕はそろそろ学校に行かないと行けないのでこれで失礼します!!」

初瀬「ん? お、おお!! 頑張れよ、吉井!!」

城乃内「じゃあねくあつ、また優子さん達と一緒に家の店に来なよ!! 店長たちと待つてるからさく!!」

吉井「ありがとうございます!! それじゃあ!!」

僕は初瀬さん達にそう言うのと急いで学校に向かうのだった。

吉井 side out

優子・秀吉 side

優子「秀吉く何でまだ男装するの？」

秀吉「それは前にも話したじゃろうて」

優子「ぶく！ 私としては早く元に戻って貰って思う存分に可愛がりたいのに」

秀吉「可愛がるとは……どういう意味での可愛がるかの？ 姉上の普段を見ている儂からすれば恐ろしい方しか想像できないのじゃ」

優子「……ふくん、あつそ」

秀吉「？ 姉上？ なぜ怒っているのじゃ？」

優子「怒ってなんかいないわよ」

秀吉「いや、誰が見たって怒っておるではないか!!」

秀吉「一体どうしたのじゃ、姉上は。儂が何か気に障るような事を言ってしまったのかの？ 姉上の事が、良く分からんのじゃ」

優子「何よ、秀吉の奴!! 私がせっかく普通に愛でる方の可愛がるって言ったのに！ それに普段の私のってあればアンタが「私の物を間違つて食べちゃったりする時のお仕置き」なのに!!」

2人は内心では疑問を抱いたり、怒りを抱いたりしながらも学校への道歩いている。近くには文月学園の制服を着た生徒もいない。この時間だとまだこの道を通る生徒



は多くないのだ。

「まあ、そこにいるのは木下姉妹じゃないですか」

優子「ん？」

秀吉「何じゃ？」

「久しぶりだな、優子。秀吉」

「相変わらず、聡明で元気で美しい子達だ」

「元氣そうで何よりだ、木下姉妹」

女性の声がして振り向いてみると、そこに居たのは私達が大好きだった人達だ。

そこには……

優子「メディックさん！ ハートさん!!」

秀吉「おお!! ブレンにチェイス!!」

チェイス「久しぶりだな」

ブレン「3か月前に会った時よりも綺麗になっっていますね。2人とも」

メディック「ブレン、それは勘違いです。って言いたいんですけど、確かに綺麗になっ

ていますね」

ハート「ああ、それにしても何で秀吉は男子の恰好をしているんだ？」

優子「あくその辺りは聞かないで？」

ハート「そうか、分かった」

秀吉「それにしても最近全然お主たちを見ぬから心配しておったのじゃぞ!!」

秀吉は腰に手を当てる頬を膨らませて怒っている。なにこれ、メツチャ可愛い。天使か、天使なのね!?

ほら、ハートさんたちも思わずニッコリしちゃってるし!!

彼らはハート、メディック、ブレン、チエイス。私たちと一緒にこの街で育った人たちだ。実は、この人たちは人間ではない。彼らは「ロイミュード」と呼ばれる機械生命体だ。そして最近では、私たちと「似た」境遇にいる人たちだ。いや、どちらかといえば「最近発生している問題の元」と同じ人たちだ。

でも、私たちは彼女たちの事を恨んだりしていない、むしろ感謝しているくらいだ。

彼らみたいな人たちが居たから、私は今もこうしていられるし彼等みたいな人間に友好的な人たちとも会う事が出来たのだから。

ハート「俺達の方も、一段落したからな。これからは何かない限りはここに居ることになったよ」

秀吉「! それは本当なのか!？」

秀吉つたら、久しぶりにハートさん達と会えてテンションが上がっているのにこれじゃあ自分は興奮が冷め無さそうね。



優子「そりゃあ、そうでしょう」

私は少し呆れながらも2つの免許証をチエイスさんに返す。

「というか、なんで運転免許証まで渡して来たのかな？ あれかな？ 自慢したいのか

な？ 子供か!!」

優子「はくなんか、私達ばかり驚かされるのは癪だしあれ見せちゃおつか」

秀吉「む。変身はダメじゃぞ？」

優子「変身はしないわよ。変身わね？」

秀吉「……何をやる気じゃ？」

ハート「変身？ おいおい、まさかお前たち」

ブレン「まさかとは思いましたが」

メディック「そ、それはッ!？」

チエイス「マツハドライバー炎!？」

優子「そう、これが私が入れた力よ」

秀吉「変身道具を見せるだけか、心配して損したの」

優子「ほら秀吉！ あなたも見せてあげなさい!!」

秀吉「農もか!?! ……むう、気は進まんが」

秀吉はそう言って懐からメガウルオウダーを出して4人に見せてみる。

ハート「秀吉の方の奴は何だ？」

ブレン「あんなものは見た事も有りません！」

メデイック「秀吉ちゃん、優子ちゃん」

チエイヌ「……それがお前たちの覚悟か」

優子「ええ、私たちはもう「命を懸けて」彼の為になるって決めたの」

秀吉「その通りじゃ、もう、明久にあんな思いをさせたくはない」

私達はそれだけ言って変身道具を鞆の中にしまった。

それを見ていたハートさんは顔を下に向けて少し肩を震わしていた、もしかして私たちが仮面ライダーになった事を怒っているのかな？

そう思っていたらハートさんの顔がいきなり上がった。そこに有ったのは……笑顔だった。

ハート「そうか！ お前たちの覚悟の大きさ!! 俺は感動したぞ!!」

ブレン「ええ!! 確かに彼の為にだったら私だって命をなげうってでもそうするでしょう!!」

メデイック「秀吉ちゃん、優子ちゃん！ しばらく見ない間に随分と強くなってる!!」

チエイヌ「歓迎するぞ、新たな戦士たち」

4人は私達のこの覚悟の重さを理解してくれている。それがとても嬉しかった。

やっぱり、この人たちといると暖かくなるなあ。学園のみんなといる時と同じくらいハート「さて、俺達はそろそろ行かないといけないが」

ブレン「すいませんが、チエイイスと一緒に行ってあげてください」

メディック「チエイイスはまだ文月学園までの行き方を覚えきれていないですから」

優子「つてチエイイスさん!!? あなたも結構、この街は長いのに何で覚えていないの!?!」

チエイイス「……良く散歩に行つて気が付いたら知らない場所に居るんだ」

秀吉「なんともまあ……」

優子「はあ、仕方がないか。それじゃあ行きましよう!! 秀吉、チエイイスさん!!」

秀吉「うむ! では行つてくるぞ!! ハート、ブレン、メディック!!」

チエイイス「では、初出勤だ。頑張つてくる」

ハート「ああ、行つてらっしやい!!」

ブレン「しっかりとやってくるのですよ、チエイイス!」

メディック「3人とも、気を付けて」

3人の声を聴きながら私たちは学校に歩いて行く。チエイイスさん、一体何の教科を担当するんだろう。そこが気になるな

優子・秀吉 side out

雄二 side

うん、明久の奴は何をやっているんだ？ 今日はずいぶん早くに学校に来て伝えてあった筈なんだが？

まさか、昨日のロックシードを渡した奴の襲撃？ いや、それは無いか

雄二「それにしても……遅すぎじゃねえか!？」

約束の時間から20分は経って居るぞ!？」

今日はBクラスに試験召喚戦争をしかける予定なのにどうするんだ  
よおおおおお!!!

雄二 side out

## 6話 惨劇はどうやって起きたのか

吉井 side

これは……一体何があつたのだろうか？

目の前にあるのは物言わぬ死体（まだ死んではないぞ!!）が複数と滝の様に大量の汗をかいている木下姉妹が互いを抱き合つて震えている。

そしてその死体（ゆうじ）の口に手作り弁当を入れる霧島さん。

本当に、僕がいない間に何が起こつたんだ!?

—— 遡る事、少し前 ——

雄二「さて、それじゃこれから対Bクラス戦の作戦会議を行う」

吉井「作戦会議つて言つたつて、どこでするのか？　と言うか、何を話すの？」

雄二「それをこれから話すんだろうが」

吉井「あ、それもそつか」

秀吉「お主は、頭が良いのか悪いのか。儂は偶に分からなくなるぞ？」

吉井「やめて！　そんな憐れむ様な目で見ないで!!」

雄二「良いから始めるぞ!」



姫路「あ、あの!!」

雄二「ど、どうした? 姫路」

姫路「あの作戦会議しながらご飯なんてどうですか?」

雄二がいい加減に作戦会議を始めようとしたときに姫路さんのその提案が出たんだ。

今思うと、この時にそれを止めなかったことがあの惨劇が起きた原因だったんだと思う。

雄二「ああ、それも良いかもな。腹が減っては戦は出来ぬとも言うしな」

秀吉「あ、だったら姉上も連れてきても良いかの?」

康太「……ツ!!」カチャカチャ

吉井「ムツツリーニ? なんでカメラを準備しているのかな?」

雄二「明久、気にしたら負けだ。それとも、愛しの優子の写真を撮られるのが我慢できないってか?」

吉井「んな／＼ 何を言っているんだよ!! ぼ、僕は別に」

秀吉「明久よ、顔を真っ赤にして言っても説得力が無いぞ?」

僕の様子を見て秀吉が呆れたように言ってくる。でも、何か少し不機嫌そうなのは気のせいなのかな?

雄二「まあ、連れてきて良いけど連れてくるんだったら早くしてくれよ?」

秀吉「分かったのじゃ」

吉井「あ、僕も一緒に行くよ」

雄二「ん〜？　なんで明久も一緒に行くんだ？」

吉井「雄二、そのニヤケ面を止めないと顔面にキック入れるよ？」

雄二「す、すまん」

吉井「まあ、僕としてもAクラスに用事が有るだけだよ」

僕はそれだけ言つて秀吉と共にAクラスに向かった。そこで僕は霧島さんに「雄二が女の事一緒にご飯食べようとしてゐるから霧島さんも一緒にどうか？」つて言つて連れて来た。霧島さんが来た時の雄二の慌てようは思いつきり笑えた。まあ、そんな感じの些細な仕返しをする為に僕もAクラスに行つたんだよね。

で、その途中で平賀君たちも一緒に来て結構な大所帯で昼食をとることになつたんだ。

雄二「それじゃあ、結構他のクラスの奴も多いが対Bクラス戦の作戦会議を行う」

吉井「その台詞、一体何度聞いた事か」

雄二「お前らが話の腰を折るからこうして何度も話すことになつてるんじゃないか

!!

翔子「……雄二、そんなに怒っていると将来、禿げちゃうよ？」

雄二「さて、早速始めようか」

平賀「あ、無視しちゃうの？」

立花「気にしたら負けなんだろう？」

雄二「さつきから平賀たちがいる理由が分からなかったが、丁度いいな」

吉井「？ 何で、Dクラスがいると丁度いいの？」

雄二「前回の試験召喚戦争は俺達Fクラスが勝つただろう？」

吉井「……あれは勝つたって言えるのかな？」

平賀「気にするな、吉井」

立花「あんな問題を起こしたんだ。こっちの負けじゃなかったらむしろ申し訳ない」

吉井「でもっ！」

秀吉「そこまでしておくのじゃ、明久」

優子「そうよ、誰がどう考えたって今回の試験召喚戦争はFクラスの勝ちで良いのよ」  
みんなが口をそろえて言うが僕としてはまだ納得が出来ない。でも、ここは納得するしかないか。次は、本気でDクラスと戦いたいな

雄二「それで、Dクラスの設備を変えなかったからな。その分の働きをしてほしいんだ」

平賀「どんな事をすれば良いんだ？」

雄二「ああ、Bクラスの室外機を壊してほしい」

吉井「ちよ!? 雄二!!」

立花「引き受けた」

吉井「立花!? もう少し考えてから答えを出そう!」

雄二「うるさいぞ、明久」

吉井「誰のせいだ!」

秀吉「どうどう、落ち着くのじや明久」

吉井「秀吉! 僕は馬じゃないよ!」

秀吉「む、すまぬ。つい」

吉井「まさかの天然だった!」

雄二「……って訳だ」

平賀「なるほど、そういう理由が」

吉井「え? 何の話?」

雄二「Bクラスを突破するために室外機を壊す理由を話していた」

吉井「あ、ちゃんとした理由があったんだね?」

雄二「お前、俺が理由も無しにBクラスの室外機を壊すとも思っていたのか?」

吉井「うん」

雄二「よし明久。ケンカを売っているんだっいたら買ってやるぞ？」

翔子「雄二、落ち着いて」

優子「明久君も思った事をすぐに口にしない」

雄二「まで木下!! お前もそう思っていたのか!？」

優子「さあ、なんのことかしらー(棒)」

雄二「お前らなあッ」

姫路「あ、あの吉井君!!」

吉井「ん? なに姫路さん？」

姫路「あの、私、お弁当を作ってきたんですけど……食べてもらっても良いですか!？」

吉井「え、姫路さんの手作り弁当を貰えるの!？」

姫路「は、はい!! 吉井君がよければ」

吉井「勿論だよ!! 是非、いただくよ!!」

優子「しまった!! 姫路さんに先を越されたか!!」

雄二「なんだ姫路。わざわざ弁当を作ってきたのか？」

姫路「はい、昨日は吉井君も試験召喚戦争で頑張っていたと思うので作ってみました

!!

秀吉「ところで、姫路は料理が得意なのか？」

姫路「は、恥ずかしながら実は料理はあんまり得意じゃなくて……」

平賀「え？ でもこれ作ったんだよね？」

姫路「はい、数日前から料理教室に通って何とか作れるようになったので」

立花「ほくこれは優子にライバル出現か？」

優子「立花君!!? 何をニヤついているのかしら？」

立花「いや別に〜？」

吉井「あ、そうだ。食べる前に飲み物を取ってくるよ。教室に忘れてきちゃったし」

雄二「早く戻って来いよ〜」

吉井「うん、すぐ戻るよ」

そう言つて僕はその場から離れた。そのすぐ後にあの惨劇の状態になっていたのだ。

吉井「で、優子さんには秀吉。僕が帰ってくるまでに何が有ったのかな？」

秀吉「じ、実は……あの後にムツツリーニが姫路の弁当をつまみ食いして」

優子「突然倒れたと思つたらすぐに起き上がって私たちに親指を立ててきたの」

秀吉「は、初めて見たときは倒れる程に美味しいって意味だと思つていたのじゃが」

優子「土屋君の足元を見たら物凄くガクガク震えていてあそこでちよつと突けばその

まま倒れるかもって程だったの」

吉井「あのムツツリーニをたつたそれだけでボロボロにするなんて、姫路さんは一体

何を作ったんだ？」

平賀「そ、それについてだが……」

吉井「平賀君!! 大丈夫!？」

平賀「あ、ああ。さつきまで死んだ婆さんと会っていたよ」

秀吉「それって臨死体験をしておるではないか!？」

優子「本当に、良く帰ってこれたわね」

吉井「と言うか、姫路さんは料理教室に通っていたんじゃないの!？」

姫路「はい、通っています」

秀吉「そ、その料理教室は何を教えておるのじゃ」

姫路「えくと……塩酸を入れればどうともなると」

優子「待つて、そこ本当に料理教室?」

姫路「はい! ほら、ここです」

姫路さんはそう言つて料理教室のチラシを見せてくる。そこには確かに料理教室と書かれている。……それよりも、僕たちはその真ん中にデカデカと乗っている人物の顔を見て驚いた

吉井「なんで凌馬さんが料理教室なんて開いているんだよ!!」

秀吉「あの人は料理とかしないじゃろう!!」

優子「……あ」

平賀「ど、どうしたの？ 優子さん」

優子「ここ、よく見て」

優子さんが指さしたのは料理教室と書かれた場所。何も可笑しい所なんて……

吉井「……料理なんかよりも化学の勉強をしよう教室？」

秀吉「小さい!! 料理と教室と書かれた間に小さく書かれておる!!」

平賀「あの人、なんでこんなに小さく書いてんの!？」

優子「姫路さん、その教室に通っている人ってどんな人が居る？」

姫路「えつと、白衣を着た人達が多かったですね」

吉井「うん、その時点で気が付こうよ!!」

姫路「いえ、最近の人はそういう服装で料理をするものだ」と

秀吉「そんなわけが無からう!!」

優子「流石にそれはフオー出来ないわ」

平賀「なあ、それよりも他の奴を起こさないと不味くないか？」

吉井「そうだった!!」

それから僕たちはすぐにムッツリーニと立花君の蘇生作業を始めて何とかこつちの世に戻すことに成功した。立花君は何か三途の川を渡りかけたみたいだったけど。



雄二は霧島さんの弁当を食べていつの間にか復活していた。

吉井「それじゃあ、この姫路さんのお弁当をどうにかしないとね」

姫路「ううゝすいません!!」

秀吉「いや、姫路は悪くないのじゃ」

優子「ええ、悪いのは……あの天災よ」

雄二「な、なあ姫路? その弁当貰っても良いか?」

姫路「え? でも……」

雄二「あく大丈夫大丈夫。それを食っても大丈夫な奴を2人ほど知っているからそいつらに食わせよう」

吉井「雄二、その2人って誰?」

雄二「俺達とは味覚のストライクゾーンが段違いで広い人だ」

秀吉「ああ、あの者か」

優子「もう1人は?」

雄二「……そっちに關しては人じゃない」

立花「人じゃない? それって……」

雄二「ちよつと行つてくる」

吉井「待った、僕も……」

秀吉「いや、儂が行こう」

優子「吉井君はここにいなさい」

吉井「え、でも「ここにいなさい」はい」

優子さん、物凄く怖いよ。

雄二「じゃあ、すぐに戻ってくる」

そう言つて雄二と秀吉は屋上からいなくなつた

出て行く時の雄二の顔は物凄く悪人みたいな悪い笑顔だつた。

吉井 side out

雄二 side

さて、この弁当と言う名の兵器をあいつがお気に召すかな？

まあ、お気に召さなくても食わすがな

秀吉「それで？ 雄二の言うこれを食べられる奴と言うのは？」

雄二「ここだ」

そう言つて俺が止まつたのは窓の前。秀吉は納得したようにああ、と呟いている。さて、そろそろ呼ぶか

雄二「こい、ドラグレッダー！」

俺がそう言うのと窓の向こう側に赤い竜が飛んできた。あれが俺の相棒、ドラグレッツ

ダー

さて、あっち側に行かないとな

雄二「秀吉、ちよつとこれを持っていてくれ」

秀吉「分かったのじゃ」

俺は秀吉に弁当を渡してポケットからカードケースを取り出して窓に向かって掲げる。

すると俺の腰にはカードケースを入れるベルトが出てくる。

雄二「変身!!」

俺はそのままカードケースをベルトに差し込む。それで俺は真紅の戦士に変身する。

そして俺は秀吉から弁当を受け取るとそのまま窓の中に入る。この「ミラーワールド」に入るには俺みたいな仮面ライダーで無いと入れない。

雄二「よう、久しぶりだなドラグレッダー」

俺の呼びかけに唸りながらもドラグレッダーは応える。ああ随分と放っておいたから機嫌悪いな。だが、これを食わせれば機嫌も直るだろう

雄二「ほら、これでも食え。飯だぞ」

まあ、ミラーモンスターのこいつがこれを食べただけで機嫌が直るかは微妙だけどな。

俺の渡した姫路特製の弁当を少し見たドラグレッダーは器用に中身だけを食べて見せた。すると、ドラグレッダーはバツタリ倒れた。

……ま、まさか、ミラーモンスターの中でも上位に入るドラグレッダーすらも沈めるのか姫路の料理は!!

って思っていたらドラグレッダーの身体が光り出した。なんだ、この現象は？

いや、前に一度だけこういうのを見た事が有った。あの時は確かッ!?

なんだ、ドラグレッダーの力が……ドンドン上がっていくのが分かる。まさか、姫路の料理はミラーモンスターを強化することができるのか!?

雄二「これは……良いものを見つけたな」

これだったらこれからの戦いにも有利に立ち回れそうだな。俺はそう思いながらミラーワールドから出て行った。

雄二 side out

優子 side

さて、雄二君があのお弁当を持っていったし明久君には私が作ったこれを食べてもらいましうか。

だ、大丈夫。姫路さんのよりは酷くないはずだから!!

優子「あ、あの明久君!!」

吉井「ん？ なに優子さん？」

優子「あの、お、お弁当を作ってきたからよ、良かったらた、食べない？」

吉井「え、良いの!？」

優子「う、うん！」

吉井「それじゃあ、いただきます!!」

明久君はそう言って私が作った唐揚げを食べる。あ、味はどうか？ 秀吉と一緒に作ったから大丈夫だと思っけど……

吉井「うん！ 美味しいよ!!」

優子「そ、そう。良かったわ」

秀吉「良かったのく姉上」

秀吉もこの結果が嬉しいのか私と一緒に笑ってくれる。

うん、ありがとうね秀吉。

優子 side out

吉井 side

みんなとご飯を食べ終わった後、僕達は一緒にテレビ電話をかけていた。

相手は勿論、あの天災だ

凌馬「はいはい、こちら戦極凌馬。お？ 吉井君たちじゃないか、どうしたんだい

「？」

吉井「ええ、ちよつとした用事が出来たのでこうして電話しているんですよ」

凌馬「どうしたんだい？ 吉井君、君の顔が物凄く怖いんだけど？」

吉井「そうですか？ 僕としてはいつも通りの顔のつもりなんですけど？」

雄二「それよりもだ、凌馬さん。アンタ、最近変な教室を開いていないか？」

凌馬「ん？ 教室？ ……あくあれか」

平賀「あれは、料理教室じゃ無かつたんですよ？」

凌馬「ああ、いや。あれは元々は料理教室だったよ」

「「「「「はあ!?」」」」」

凌馬「いや、実はね、湊くんが料理教室を開く予定だったんだけど私が乗っ取りて別の教室を」

秀吉「乗っ取りつて！ 乗っ取りつて言いかけたぞあやつ!!」

凌馬「まあ、そんな感じで湊くんから物凄く怒られてしまつてね、何でだろう？」

立花「アンタの行動を思い返してみろ!! お蔭でこっちは死にかけてたわ!!」

凌馬「ふむふむ？ つまり、元々は湊くんが料理教室を開く予定だったが私が乗っ取り、そこで開いた教室で学んだ女の子がそれを料理と勘違いして君たちを殺しかけたから……あ、全部私のせいだ!! 湊くん、全部私のせいだ!! ふうっ」



## 7話 波乱を呼ぶのは誰か

Bクラス戦が始まる少し前

「なあ、これさえあれば俺は誰にも負けない力が手に入るのか？」

「ええ、それは間違いないです。その「ガイアメモリ」が有れば……」

「まあ、俺が最底辺クラスに負けることは無いだろうが保険は用意しておいた方が良くからな」

「まあ、俺としてはそいつを使って暴れてくれればそれでいいさ」

「ああ、ありがとう。それじゃあな」

「ああ……思う存分、暴れまわってくれ」

文月学園の校舎裏でフードを被った男と生徒が「ガイアメモリ」の取引をしていた。

しかし、その取引はその場所だけで行われていた訳では無かった。

「ふくん、これが「ガイアメモリ」？」

「そうだ、これで俺達は誰にも負けない。例えばAクラスが相手でもな」

「ふふ、それは凄いわね。私達がこの学園最強になるのね」

「ああ、これで俺達が学園最強だ!!」



「……ねえ、本当にこれで「あいつ」を私の物に出来るの？」

「ああ、出来る。その力さえあればな」

「ふふつ、今まで「あいつ」の周りが邪魔だったからね。これでッ!!」

「……バカな奴ら程、扱いやすいな」

「何か言った？」

「いや、それじゃあ俺はもう行くぞ」

「ええ、ありがとうね」

こうして、文月学園に波乱の嵐が巻き起こる

吉井 side

さて、昨日島田さんがBクラスに宣戦布告したから今日も試験召喚戦争だ

まったく、2学年になってから前以上に忙しいね。まあ、でも楽しいから別に苦でもないけどね。

吉井「それで雄二、今回の作戦は？」

雄二「特に作戦らしい作戦は無い。姫路を前線に出して相手を教室に押し込む。それが作戦だ」

吉井「姫路さんを前線に、かあ。僕は何をすればいいの？」

雄二「お前は姫路のサポートにでも回ってくれ」

吉井「分かったよ」

僕は教室に向かう途中で雄二から聞かされた作戦について考えていた。

今回の僕の役目はサポート、と言う事は本気でやっても良いのだろうか？

いやいや、僕の本気はAクラス戦まで取っておくべきか。

雄二「皆、総合科目テストご苦労だった。午後はBクラスとの試召戦争に突入するが、

Bクラスを殺る気は十分か？」

「「「「「おおおおおおお！！！！」」」」

おっと、僕の考えている間に話が進んでいる。うん、こっちのクラスの士気は中々に高いね。でも、士気が高いだけで勝てるほどの戦争も甘くは無いだらう。

「それで、今回のBクラス戦では姫路瑞希には前線部隊で指揮を取って貰うことにした」

「「「「「おおおおお！！ やったぜえええええええ！！！！」」」」

みんな、やる気が出るのは良いけど熱すぎい。なんか、みんなの背後に物凄く燃えている炎が見えるけど気のせいだよな？

キーンコーンコーン

昼休み終了のチャイム、これはすなわちBクラス戦の開幕の合図だ！

雄二「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

「サー！イエツサー！」

「み、皆さん頑張つて行きましょう！」

「「「任せて姫路さああああああん!!」「」」」

吉井「すごい現金な奴らだ!!」

そのままBクラスへ行く為の廊下へダツシユするFクラスの皆。確かにやる気は十分だった。

さて、僕も姫路さんのサポートの為に行くとしますか

姫路「み、皆さん待つてくださ〜い!!」

あ、みんな姫路さんの事置いてきぼりにしているよ!? 勢いは大事だけど隊長を置いて行つちやだめだよ!?

先行く皆に追いつこうと慌てて走り出す我らが前衛部隊隊長。威厳は無いけど可愛らしさは最高だね!

「いたぜ! Bクラスの連中だ!」

「高橋先生を連れてるぞ!」

「生かして返すな〜っ!」

Bクラスへと向かう廊下を僕たちは一気に走り抜けると、向こうからBクラスらしき

メンバーがこちらに早足で向かっているのが見えてきた。様子見のようで、人数は十数人しかいない。これは僕らにとってはありがたいねっ！

「来たぞ！ Fクラスの連中だ!!」

「囲まれるな!! 単体だったら恐れるに足らない!!」

「Bクラス、舐めんじゃねえぞ!!」

Bクラスのメンバー達もやる気十分にこっちに向かってくる。各個撃破を狙っているみたいだけどそうはさせない!!

吉井「皆！ 無理はせずに、出来るだけ一塊になって挑め!!」

「了解だ、吉井!」

姫路「あ、ありがとうございます。吉井君!!」

姫路さんのお礼の言葉を言った直後に、Bクラスのメンバーは声をあげて戦闘態勢に入った。

……何か、胸騒ぎがする。何も起こらなければ良いけど。僕がそう考えている

内に、両クラスメンバーは戦闘を開始していた。

「開口一番の勝負を頼むぜ! 試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モ</sup>」

「俺も舐められたものだ!! 試獣召喚《サモン》」

Bクラス 戸村 大地 化学 174点 VS Fクラス 須川亮 化学 180点

戸村「げっ!?!」

須川「なめたのは果たしてどっちだぜこのやろう!」

須川君が得意科目の化学で勝負に挑んだ。Dクラス戦で悩んで、頑張った須川君には簡単な敵だろう。

「そのアンタ、俺と英語で勝負だ! 試獣召喚《サモン》!」

「むーやってやろうじゃない! 試獣召喚《サモン》!」

また、が近くにいるBクラス女子に勝負をしかける。大変悔しいけど、横溝君は英語だけ・・・英語だけっ! は凄いいみだから、英語担当の藤田先生についてもらっついてる。これならバカな横溝君でも戦力になるだろう。・・・そこっ! お前はどうかんだよっでっツツ込まないで! 後で観察処分者として鍛えられた僕のすばらしい腕前を見せてやるから!

Bクラス 金田一 裕子 英語 153点 VS Fクラス 横溝浩二

英語 110点

裕子「ウソっ…!?!」

横溝「悪いが、英語だけは得意科目なんだ！」

須川君と横溝君は頑張ったみたいで点数も良い。あの二人の心配はしなくて大丈夫だろう。むしろ他の所がやばい。さすがBクラスという奴だ。

Bクラス 野中 長男 総合 1943点 VS Fクラス 近藤

吉宗 総合 764点

Bクラス 丸尾 集 物理 159点 VS Fクラス 武藤

啓太 物理 69点

点数差がひどくてどんどんと劣勢になっている。0点になるとその勝負には参加できなくなってしまうから、それだけは避けたい

「せやあつ！」

「ぐわあつ！」

「さ、沢井ー！」

って思っていたら早速、沢井君がやられた。って早くない!?!まだ始まってすぐだよ!?!  
そして誰も援護はしてやらなかったのかな——!

吉井「沢井君の代わりに倒した相手を囲んで倒すんだ!!」

「「「了解!!」」」」

姫路「よ、吉井君！ わ、私も戦ったほうが……」

吉井「まだだよ、あっちの主力の人と戦ってもらいたいんだ」

姫路「わ、分かりました」

さて、僕もそろそろ本気を出して行かないとね

「おい！ 姫路さんが居たぞ!!」

「あの子は不味い!! この場で仕留める!!」

って、姫路さんに気が付いてあっちから戦闘を仕掛けてきた!?

姫路「う、受けます!! 試獣召喚《サモン》!!」

「ここは私達に任せて!!」

「姫路さん覚悟!!」

あっちからは女子二人が出て来た。

二体一か、姫路さんだったら心配ないって言いたいけど……なんなんだ、この嫌な感じは

岩下「長谷川先生！ Bクラス岩下律子がFクラス姫路瑞希さんに数学勝負を挑みます。」

菊入「先生！ 菊入 真由美も参加します！」

「試獣召喚《サモン》!!」

ま、不味い! 援護しないと!!

姫路「吉井君、私は大丈夫です! そこで見えてくください!!」

姫路さんと岩下さん、菊入さんの召喚獣が出現する。

Bクラス 岩下 律子 189点 VS Fクラス 姫路瑞希 412点

Bクラス 菊入 真由美 151点

つて、姫路さんの数学のテスト400点超えている!?

じゃあ、腕輪も……

吉井「ひ、姫路さん。もしかして……」

姫路「はい、今回の数学は結構解けたので腕輪も……」

岩下「え!? そ、それって!!」

菊入「私達が勝てるわけじゃないじゃない!!」

うん……岩下さんと菊入さんは運が無かったね。

今は敵とは言え同情しちゃうな

姫路「それじゃあ、行きます!!」

岩下「ちよ! ちよつと待ってよ!!」

菊入「律子!! とにかく避けるの!!」



岩下さんと菊入さんの召喚獣がそれぞれ別の方に飛んだ時、姫路さんの腕輪から光線が放たれた!!

Bクラス 岩下 律子 0点 VS Fクラス 姫路瑞希 412点

その光線は岩下さんの召喚獣を一瞬にして飲み込み、一瞬にして戦死させたあの腕輪の効果は中々強いな、200点近い点数を一瞬で0点にするなんて。

姫路「ごめんなさい、これも勝負なので!!」

姫路さんはそのまま召喚獣を操って菊入さんの召喚獣も切り伏せてしまった。

「い、岩下と菊入が一撃だと!？」

「姫路さん、予想以上に危険だ!!」

「他のメンバーで抑えるわよ!!」

「させるか!! 俺達の事も忘れてんじゃねえぞ!!」

「Bクラスのメンバー二人を討ち取った流れに、このまま俺達も続くぞ!!」

「Fクラス、突撃いいいい!!」

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

Fクラスのメンバーの士気も上々みたいだ。

「このまま行けばBクラスを教室まで押し込められるな。」

「……明久」

吉井「突然背後に現れないでよ、ムツツリーニ」

流石は忍び寄り影ことムツツリーニだ。いきなり現れたから少し驚いちやったよでも、なんで雄二と一緒に居る筈のムツツリーニがここにいるんだらう？

吉井「どうしたの？ 雄二の護衛をしているはずじゃなかったっけ？」

土屋「……Bクラスの代表が根本らしい」

吉井「……根本って『あの』根本恭二？」

根本恭二、黒い噂ばかりを聞く生徒だ

曰くカンニングの常習犯だとか、喧嘩には刃物を常時持ち出し、球技大会時には対戦相手のクラスの食事に細工をしたなんてものも有る。

そんな奴が代表か……少し警戒したほうが良いかも知れないな。

吉井「それで？ 警戒したほうが良いって事を伝えるためにここに来たの？」

土屋「……違う。それよりも厄介」

吉井「どういう事？」

土屋「……さつき監視カメラをチェックしていたら根本が「ガイアメモリ」をアイツから受け取っていた」

吉井「なんだって!？」

土屋「だから……明久も変身できるように準備しておけ」

吉井「そんな……」

土屋「……もしもの時は、俺が何とかする」

吉井「何とかって？」

土屋「……それはまだ秘密だ」

それだけ言つてムツツリーニはまた消えた。

相変わらず、忍者の様に神出鬼没だ。

吉井「……姫路さん、僕は一旦教室に戻るよ」

姫路「あ、はい！ 分かりました!!」

戦国ドライバーは僕の教室の鞆の中に有るんだ。

ムツツリーニに忠告されたし急いで戻らないとね

あ、その前に

吉井「島田さん」

島田「な、何よ」

吉井「僕はちよつと教室に戻るから、それまで部隊長を君に任せるよ」

島田「わ、分かったわ!!」

よし、これで良い。急いで戻る!!

……これは、一体何が有ったんだ？

卓袱台はボロボロ、座布団の綿も引き裂かれて飛び出ている。それに教室の壁にも切り裂かれた跡が有る。

明らかに人間業じゃないな。これは

……つく!! 遅かったか!! 僕の戦国ドライバーも無いぞ!!

吉井「やられた……まさかこんな手段を取ってくるなんて」

秀吉「あ、明久よ。この惨状は何なのじゃ？」

雄二「これは……酷いな」

雄二たちも教室に戻ってきた。不味い、僕の戦国ドライバーが盗まれたことを知られたら大変なことになる。

吉井「僕は嫌な予感がしたから戻ってきたらこうなっていたよ。それよりも雄二たちは何でいなかったの？」

雄二「ああ、Bクラスから協定を結びたいと申し出られてな、教室を開けていた」

吉井「協定だって？」

秀吉「うむ、四時までに決着が付かなかつたら明日の午前九時に持ち越しし、その間の試験召喚戦争に関する一切の行動を禁止するという協定じゃ」

吉井「それで、それを結んだの？」

雄二「ああ、俺達は体力勝負に持ち込めば勝てるだろうが……姫路は病弱だ。その作戦は使えない」

吉井「確かにそうだね」

雄二「恐らくだが、アイツ等を教室まで押し込んで今日は終了するだろう。そうなる  
と作戦の本番になる明日には姫路の戦闘能力が必要不可欠だ」

吉井「だから今回の協定を受けたんだね？」

雄二「そうだ、この協定はアイツ等にとつてもこつちにとつても都合が良い物だから  
な」

協定については分かったけど、この教室の惨状はどうしようか。これだと補給テスト  
にも影響が出そうだ

「よ、吉井！ 坂本!!」

そんな時に、教室に須川くんが飛び込んできた。その様子からただ事ではないよう  
だった。

まさか、根本君がドーパントになったのか!?

吉井「どうしたの、須川君!!」

須川「し、島田が！ 島田がBクラスの人質になった!!」

秀吉「な、何じゃと!?!」

教室の破壊工作の次は人質作戦か！ 根本君、本当に卑怯な!!

吉井「雄二！ 僕が行く!!」

雄二「ああ、頼んだぞ!!」

僕は須川君に案内されるまま走った。するとBクラス前付近の廊下に島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制してくる。成る程、ただ戦死させるんじゃないやなくて、人質を取って補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

「ど、どうする!? これじゃあ手が出せない!!」

吉井「<sup>ひ</sup>総員突撃用意！」

「「「「え?」」」」

須川「ちよ、それでいいのかよ? あつちには島田がいるんだぞ!!」

吉井「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

今回ばかりは人質になった島田さんに構ってられない。それに島田さんには部隊長を代わりに任せたはずなのに何で人質になっているんだ?

「ちよ、ちよつと待て！ 吉井!!」

吉井「なに？ 言っておくけど……今の僕はとて、とても機嫌が悪いんだ」

「(ト、ト、ト)いつが！ な、なんで捕まったのか気にならないのか!」

吉井「……バカだからじゃないかな？」

島田「アンタを殴り倒すわ!!」

吉井「ああ？」

島田さんの物言いについて、僕のドスの聞いた声が自然と口から出てしまった。

それを聞いたみんなは「ひっ!!」って情けない声あげているけど気にしない。

吉井「……じゃあ、何で捕まったのかな？ 島田さんには部隊長を任せていたんだけ

ど?」

「コ、コイツはな『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室

に向かったんだよ」

吉井「えっ!?! 島田さん……」

島田「な、なによ……」

吉井「怪我した僕に止めを刺しに行こうとするなんて、あんたは鬼かあ!!」

まさかそんな嘘の騙されるなんて……どんだけ僕が嫌いなのださ!?

島田「違うわよ!!ウチがあんたの様子を見に行つちや悪いっての!?!これでも心配した

んだからね!!」

吉井「……島田さん、それマジ？」

な……んだと？」

あ、あの暴力の根源の様な存在の島田さんが心配した、だと?!

島田「そ、そうよ。悪い!？」

吉井「へっ、やっつと解ったか。それじゃ、大人しく……」

島田『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから!!」

しーん……

………よし

「……総員突撃!!」

島田「ちょ!?! 何で!?!」

吉井「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要らん!! 居ても足手纏いだ!!」

「お、おい待ってって! 見捨てるのか!?! そんなあつさり味方を見捨てるのか!?!」

吉井「黙れ!! さあ、そいつにはもう人質としての価値は無い! 大人しく往生ろ!!」

須川「まあ、こればかりは島田が悪いからな」



僕の言いたいことを理解してくれたのか須川君達もうんうんと首を縦に振って  
 ている。

「くつ、畜生っ！ だったら望み通り、コイツを道連れにしてやるよお!!」

「やらせねえ!!」

Bクラス 鈴木二郎 英語W53点 VS Fクラス 福村 幸平 英語W

70点

Bクラス 吉田卓夫 英語W30点 Fクラス 工藤 信也 英語W5

5点

Bクラスの奴がやけを起こして島田さんを攻撃しそうになった時、囲んでいたFクラ  
 スのメンバーがすぐさま攻撃してそのままBクラスのメンバーを戦死させて見せた。

西村「戦死者は補習ううう!!!」

「ぎやあああ!!!」

「助けてえー!!!」

打ち取った瞬間、西村先生に担ぎ上げられて補習室に連行されるBクラスの2人。

ふと思ったんだけど、西村先生はどうやって戦死者の存在を察知してるんだろ？

まさか、あの身体のどっかに「戦死者察知センサー」でも着けてるんだらうか？

まあ、そんな事を考えるより…

吉井「島田さん…」

島田「吉井!! よくも見捨てよう…」

島田さんは僕に掴みかかろうと近づくけど、それを僕は避ける

島田「ちよつと! 　なんで避けるのよ!! 　歯を食いしばってお仕置きを受けなさい!!」

吉井「…いい加減にしろよ?」

島田「え?」

『パァン!!』

「!?!」

いきなり僕にひっぱたかれたことよって島田さんはたたらを踏み目を白黒させる。

他のみんなも僕の行動に目を見開いて驚いている。まあ、僕の方から女の子に手を挙げるなんてことは滅多にないから当然か

吉井「君ね、敵の偽情報に踊らされて他の部隊の皆を危険に晒したばかりか、指揮官が持ち場を離れた理由は何なの? 　僕は君を信じて指揮を任せて行ったのに、危うく部隊が全滅するところだったんだよ?」

島田「だ、だって吉井が…」

吉井「言っておくけど、そんな物は理由にならないよ。君のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ？ それを分かっているのか?!」

島田「あ……う……」

吉井「さつき言った台詞、アレは芝居でも何でもないよ。僕としては自分本位な事しか考えない様な奴は、別に居たって邪魔になるだけなんだよ。ここではつきり言わないと多分、一生分からないだろうからここで言っておけるよ、そんな奴は足手纏いなんだ!!」

島田「……」

吉井「みんな、急いで戻って明日についての作戦会議をするよ。ちよつと教室は酷いことになっているけど」

須川「お、おう分かった」

福村「ん？ 教室が酷い事ってどういう事だ？」

吉井「まあ、行けば分かるよ。それじゃあ行こうか」

僕たちは呆然と立ち尽くす島田さんを置いてFクラスの教室に戻って行った。

……少し、きつく言い過ぎたかな？ 戦国ドライバーが無いから僕も焦っていたのかもしれない。

後で、ちゃんと謝らないと

吉井 side out

島田 side

吉井が私の事を叩いて怒った。何時もは私が何をしても怒らないのに、どうして？  
私が一体何をしたのよ!!

あの優しい吉井が……何で

………アア、ワカツタ。ヨシイノマワリニイルヤツラガヨシイヲオコラセタン  
ダ。

ダツテソウジヤナキヤアノヨシイガワタシヲオコルワケガナイ!!

ヤツパリ、ワタシガヨシイノマワリノ「ゴミソウジ」ヲシナイト

島田「………待ってよ、みんな」

吉井「どうしたの？ 島田さん」

島田「吉井………今、私がそいつら片づけるから」

須川「は、はあ？ 島田、お前は何を言ってる」

島田「黙っていなさい、吉井を可笑しくする元凶は全部、私が！ 壊してあげるの!!」

吉井「島田さん!! 君は一体何を言っているんだ!?!」

吉井が何か言っているけど気にしないで私は今朝「あいつ」から受け取った吉井を私

の「物」にする秘密道具を取り出す。

私にとつてもなく大きな力をくれるこの力で!!

島田「さあ、吉井。あなたは今日から私の物よ」

吉井「ッ?!! 島田さん!! それは「ガイアメモリ」じゃないか!!」

島田「ええ、私の手にした私だけの力よ!!」

「エツジ!!」

私は「エツジガイアメモリ」を首筋のコネクタに入れて私だけの力を発動させる。

さあ、これで私の物よ! 吉井いい!!

島田 side out

吉井 side

……島田さん、君はどうやら心底僕を怒らせたいみたいだね。

まさか、みんなの前で「ドーパント」になるなんてね

さっきの音声で分かったけどあれは「エツジドーパント」か。教室の壁に切り裂かれた跡が有ったけどあれは島田さんの物だったのか。

……まさか、Bクラスの人達をFクラスに入れたのは島田さんか?

それを確かめるためにも、まずはこの「エツジドーパント」をどうにかしないと!!

吉井「みんな! 今すぐにここから逃げるんだ!!」

須川「よ、吉井はどうするんだ!？」

吉井「僕が時間を稼ぐから早く!!」

福村「わ、分かった!!」

みんな僕の指示に従って避難してくれた。これで後は気にしないで戦える。今の僕には戦国ドライバーは無い。でもね、対抗手段は有るんだよ？

吉井「試獣召喚《サモン》!!」

島田「な、なんで召喚獣を先生の立ち合いもなしに!？」

僕の召喚獣は緊急時には教師の立会無しで召喚することができただけ、そんな事を説明してやるほど今の僕は機嫌が良くない。

吉井「……【変身】」

僕がそう言うと、僕の召喚獣がオレンジロックシードを手にロックを解除する。

その時、召喚獣が持っていたオレンジロックシードが変色して紫色になってしまう。

「ブラットオレンジ!!」

……ブラットオレンジアームズになっちゃったか。それくらい、今の僕は怒っているんだね。

島田さん、君は「ガイアメモリ」に手を出したただけじゃなくて自分のクラスメイトにも手を出そうとしたんだ。

僕はそんな人を放っておくつもりは無いんだ。だから、僕はこの怒りのままに君を倒すよ

ロックオン！ ソイヤツ！ ブラッドオレンジアームズ 邪ノ道・オンステージ！！  
その音声の後、僕の召喚獣はいつものオレンジアームズに似ているがどこか違う姿に変身した。

島田「な、なによそれ！ なんであんたの召喚獣が私みたいな姿になるの!？」

吉井「言っておくけど、今の僕はそんなことまで説明できるほど優しくは無いんだ」  
さて、さっさとこの厄介な友人を助けてあげないとね。

怒っていると云っても、大切な友達が間違った道に行くのを止めないのは友達なんかじゃないからね!!

吉井 side out

??? side

ふん、あのFクラスのバカ女。見事にやってくれたな、お蔭で厄介な吉井と姫路を無力化できそうだ。今の俺達は最強だが、念には念を入れるタチだからな。

これでアイツ等が勝てる可能性は万に1つも無い。

さあ、せいぜい明日は無様に負けて俺達の力を見せつけさせてくれよ？

俺はそう思いながらこの教室で「スカル」の「ガイアメモリ」を握って笑うのだった

## 8話 駆けつける戦士は誰なのか？

吉井side

ガイアメモリには物凄い膨大な地球の記憶と強力な毒素がある。

それをメモリドライバー無しで使うと理性を無くしてしまう。今の島田さんが正しくその状態だ。

だから、何とかして、メモリを取り出さないと!!

島田「あはは!! そこお!!」

吉井「つし、しまった!」

僕が考えている間に出来た一瞬の隙を突いて、島田さんがその腕のブレードを振り下ろしてくる。

その時のブレードの動きが物凄くスローに見えた。

「吉井!! 伏せろ!!」

吉井「!?」

後ろから突然聞こえた声に驚きつつも言われたとおりに伏せる。

すると島田さんの身体から火花が飛び散る



島田「ぐう!? な、なに!」

チエイス「大丈夫か、吉井!!」

吉井「チエイスさん!?! なんで」

チエイス「説明はあとだ! 今はそいつを……」

吉井「待つて! チエイスさん、その子は島田さんなんだ!!」

チエイス「なに!?! 島田だと!!」

吉井「そうなんだ! だから手加減しているんだけど……」

チエイス「吉井!」

僕が顔を俯かせるとチエイスが僕の胸ぐらをつかんで顔を上げさせる。

吉井「ち、チエイス?」

チエイス「お前が優しいのは知っている。だが! 今の島田が手加減しても勝てる相

手だと思っているのか!」

吉井「それは……」

チエイス「……俺は、いや俺達はお前の優しさに救われたがお前のそれは危うい物でもある」

チエイス「だから、ここは俺に任せろ」

吉井「任せろって……僕も一緒に!」

チエイ ス「さつき、土屋から連絡が入った。坂本がCクラスの元に向かったとな」

吉井「え!? 雄二が」

チエイ ス「根本がガイアメモリを持つていることはもう知ってるだろう。その為のBクラス包囲網を作るために向かったそうだ。だからお前は坂本を守れ!! 島田は俺が必ず救つて見せる」

吉井「……分かった、ここは任せたよ? チエイ スさん」

チエイ ス「任された」

僕はそれだけ言つて急いでCクラスに走つていく。

頼む、雄二! 無事でいてくれよ!?

吉井 side out

チエイ ス side

吉井はちゃんと向かったか。

さつきも言つたが、アイツは知り合いがこうなつた時に自分の優しさのせいで自分を追い詰めてしまう。

それだけは有つてはいけけない、だから俺達も戦うんだ。

島田「吉井いいいい!!!! どこに行ったあああああ!!!!」

チエイ ス「……本格的にガイアメモリに飲まれ始めたか」

不味い、早くガイアメモリを出さなければ。

チエイヌ「悪いが、さっさと決めさせてもらおう」

俺はそう言つて腰にマツハドライダー炎を掲げる。

するとそこからベルトが自動で巻かれて準備が完了する

チエイヌ「変身！」

俺はそのままシグナルバイクをセットして変身を完了させる

シグナルバイク！

ライダー！！

チエイヌ！！

チエイヌ「仮面ライダーチエイサー！ 行かせてもらおう！！」

島田「邪魔だアアアアアあああああ！！！！」

エッジドールパントの攻撃を軽々とかわひ続けるチエイサー。

そして回避しながらもチエイサーは少しづつだが攻撃を当て始める。

チエイヌ「っふ！ どうした、俺はここだ」

島田「邪魔をスルナアアアア！！」

チエイヌ「……ガイアメモリの毒で通常の思考回路が働いていないな」

島田「吉井いいいい！！！！」

チエイヌ「……今、楽にしてやる」

俺はそう言つて手をかざす。

すると背後からライドチェイサーが走ってくる。

そしてライドチェイサーから一つの武器が射出されてくる。

俺はそれを掴むと同時に構えてエッジドーパントに向かって行く。

今、俺が持っているこの武器は「シンゴウアックス」

俺はこれで今までたくさんの敵を倒して来た。

そして、このシンゴウアックスには特殊な効果が有る。

これを使えば、今の島田を救う事は容易い。

俺はすぐにシンゴウアックスにシグナルバイクを装填する

必殺！ マツテローヨ！！

チェイス「今、助けてやる！！」

島田「吉井いいいい！！！！」

イツテイーヨ！！

エネルギーが満タンになった瞬間に、合図のアナウンスが入る。

そのアナウンスを聞いた俺はすぐに手元のボタンを押してそのまま振りかぶる。

シンゴウアックスを振り下ろすとそれに合わせて横断歩道の斬撃が飛ぶ。

その斬撃はそのまま島田が変身したエッジドーパントを正確に捕えた。

島田「ぎやあああああああああ

！！！！！！」

そのまま島田は絶叫を上げながら爆発に巻き込まれた。

爆炎が晴れると中心には少し頬に傷が出来ているだけのほとんど無傷の島田が寝ころんでいた。

その近くには粉々になった「エッジ」のガイアメモリが転がっていた。

俺の持つ、シンゴウアックスの特殊な効果。それは人間に害を及ぼす物のみを破壊するものだ。

これは俺の武器を作ってくれた沢神りんなが取り付けてくれた効果だ。

チエイス「……さて、これはどうするか」

「どうするかって、運ぶしかないんじゃないかな?」

チエイス「そうだな……む?」

可笑しい、この場には俺は今一人しかいない筈だ

なのになぜ、俺のこの眩きに答える奴がいる?

「いや、チエイスさん。後ろ見よう?」

チエイス「ん? ……お前は」

工藤「やつほく久しぶりチエイスさん」

チエイス「ああ、久しぶりだな」

工藤「ふふつ、その力にシンゴウアックスも上手く使ってくれているみたいだね?」

チエイズ「ああ、クリムとりんなのお蔭だ。ありがとうと伝えておいてくれ」

工藤「うん、分かったよ」

チエイズ「さて、それじゃあこの子を運ばないとな」

工藤「一応、ガイアメモリの汚染が無いか確かめたいから保健室に運んでくれる？」

チエイズ「分かった。保健室だな」

俺は工藤に言われた通り、島田を保健室に運んで行った。

チエイズ side out

吉井 side

チエイズさんにあの場を任せた僕はそのまま雄二の向かったCクラスに走る。

でも、向かう途中に僕の携帯が震える。

吉井「つち、誰だよこんな時に!!」

僕は急いでCクラスに向かった雄二を護衛しないとイケないのに。

僕はすぐに携帯を取って見てみる。

そこには差出人不明のメールが届いていた。

吉井「……なんだ、このメールは」

「あなたの戦国ドライバーは根本が持っているが、今は持つておらず根本のロッカーの中に保管されている」

このメールの主は何者だ？　なんで僕の戦国ドライバ―の在処も知っている？　僕にこれを教えてきたのは誰だ？　Bクラスの誰かか？

まあ、良い。それよりもこのメールが本当だったら根本のロッカーには僕の戦国ドライバ―が有る！

そう思い、僕は先にBクラスに向かうことにした。

Bクラスに着くと、そこにはまだ下校時間になって少ししか経っていないのに誰も居なかった。

そこに少し疑問を持ったがすぐに切り替えて根本のロッカーを探す。

すぐに根本のロッカーは見つかったが、根本のロッカーには鍵が掛かっていた。

僕はそれを蹴り壊して中を確認する。

吉井「凄い、本当に有った」

そこにはメールの通りに僕の戦国ドライバ―が入っていた。

これで不測の事態には僕が自ら戦える。

吉井（それにしても、あのメールの送り主は誰だったんだろう？）

気になる事が有ったけど雄二が心配な僕は走ってCクラスに向かう。

吉井が去ったBクラスの教室の窓際に一人の女子生徒が立って居た。

いつからそこに居たのかは分からないが、吉井はその女子生徒に気が付いていなかった

た。

「…………ふふつ、元氣そうで安心したよ吉井。頑張つてね、仮面ライダー」  
それだけ言うとその女子生徒の身体がすうっと消えてしまった。  
まるで、初めからそこには誰も居なかったかの様に。

そう、まるで「幽霊」の様に

Bクラスを出て暫く走るとCクラスに入ろうとする雄二たちを発見した。

僕はすぐに雄二たちに声をかけて入るのを止める

吉井「はあはあ!! 雄二!!」

雄二「ん? 明久か、どうした?」

肩で息をしている僕を見て雄二は不思議そうに首をかしげる。

そんな雄二を見て僕は少し安心する。

吉井「雄二、何でCクラスに?」

雄二「何でって……お前は知っているんじゃないか? Bクラスの根本の持っている物について」

吉井「まあ、分かるよ。さっきもそれを相手にしていたからね」

雄二「…………なに?」



吉井「ちよつと島田さんがね……」

雄二「島田、島田だと？」

吉井「うん……ガイアメモリで暴走してこつちを襲つてきたよ」

雄二「何でアイツが、俺達を襲うんだ!？」

吉井「分からない、でも……根本達と同じ奴からガイアメモリを受け取つたのかも」

雄二「そうなると、これは急いで根本達Bクラスをやらないとな」

吉井「うん、僕もそれに賛成だよ」

雄二「よつしやあ、そうと決まればCクラスに協定を持ちかけよう」

雄二と僕は頷いてCクラスの扉を開ける。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開いて早々に雄二は大きな声を出して告げる。

Cクラスの教室には帰っている生徒が余りおらず、かなりの人数が残っていた。

……ん？ いや、待つた。いくら何でも多すぎないか？

これが本当に「Cクラス」の人達だけなのか？

「私だけど、何か用かしら？」

そんな風に考えている僕達の前に出てきたのは黒髪のベリーショートにした気が強そうな女子だ。確か小山友香さんだったかな？ バレー部のホープとか呼ばれている

みただけ。

雄二「ああ、今日はFクラス代表として……」

吉井「待った雄二!!」

嫌な予感がした僕は雄二の台詞を途中で止める。

その様子に驚いた雄二は僕を見る。

小山さんは……見るからに不機嫌そうに舌打ちをしてきた。

小山「で？ Fクラスの代表として、何かしら？」

吉井「その前に、聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

この嫌な感じ、間違いない。何時もある時に感じている感じと同じだ。

つまり小山さんは……

吉井「そこに何でBクラス代表の根本がいるのかな？」

「「「「なっ!?!」」」」

僕の質問にその場に居た殆どの人間が驚いたように声を上げた。

雄二は勿論驚いているし、Cクラスの人達も僕の発言に驚いている。

でも、小山さんは驚いていない、これはやっぱり……

吉井「確か、僕達FクラスとBクラスは四時までには決着が付かなかつたら明日の午前九時に持ち越しし、その間の試験召喚戦争に関する一切の行動を禁止するって言う不可

侵条約を結んだはずなただけど？」

小山「不可侵条約ねえ……。そう言っているけど、根本クン？」

根本「おいおい、何言っているんだ？ 確かに結んだが、お前の方が先に破ったただろう？」

吉井「なっ?! 根本君！ それは一体どういう……」

根本「まだ分からないか？ これだから観察処分者は……」

根本がいきなり出てきて言った意味不明な一言によって、僕は驚愕の声を出す。

結んだが先に破ったのは僕達Fクラス？ この状況はどう見てもBクラスの方が破っているじゃないか!! 何を言っているんだこの男は!?

根本「酷いじゃないかFクラスの皆さん。先に協定を破ったのはそっちなんだぜ？ 試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

吉井「何を言って……」

根本「さつき、4時過ぎにFクラスの島田が俺達Bクラスの生徒に突然暴行を働いたんだ。その時、あいつは召喚獣を変な化け物にして攻撃をしてきたんだ。さて、それでもお前たちは自分たちが不可侵条約を破っていないなんて言えるかな？」

根本の言葉を聞いて僕はあの時の時間を確認する。

……いや、あれはまだ4時を過ぎていない!!

じゃあ、こいつが言っていることは……

吉井「嘘をつくな!! 僕はさつきまで島田さんと一緒に居た! 彼女を止めたときは

まだ4時になってなくていなかった!!」

根本「っは! それをお前以外に誰が証明するんだ?」

吉井「それは……」

根本「ここまで来ると見苦しいな。さあ、ここでさつきとくたばってくれ」

僕の発言も空しく、根本が告げると同時に、他のBクラス生徒達が動き出した。

「長谷川先生! Bクラス芳野よしのが召喚を……」

須川「させるか! Fクラス須川が受けて立つ! 試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召<sup>ン</sup>喚!」

『Fクラス 須川亮 数学 41点』

V S

Bクラス 芳野孝之 数学 161点』

Bクラス芳野さんが雄二に対して攻撃を仕掛けようとした所を、間一髪で須川君が身代わりになってくれた。良い判断だ。もしここで代表の雄二がやられたらFクラスの敗北が決定しちゃうからね。

吉井「僕等は協定違反なんてしていない! これはCクラスとFクラスの……」

雄二「無駄だ明久！ コイツ相手にそんな言い訳は通用しない！ どうせ根本はお前の発言を『目撃者がいなければ信用に値しない』って言って白を切るに決まっている！」

根本「ま、そゆこと♪」

あのヤロウ！ こうなる事が分かっていたくせに抜け抜けと……！

「ならば、証言すれば良いのだろうか？」

その時、僕達の後ろから声をかけてくる人がいた。

全員が振り返るとそこには工藤さんに優子さん、それにチエイイスさんが立って居た。

吉井「工藤さんに優子さん！ チエイイスさんまで……」

優子「こんな姑息な手に出るなんてね」

工藤「BクラスにもCクラスにも失望しちゃったな」

チエイイス「貴様等、自分たちが何をしているのか分かっているのか？」

三人は声に怒気を含ませながらクラスの中の人達を威圧する。

根本「……Aクラスの上位の人達にチエイイス先生まで、一体どうしたんですか？」

そんな三人の威圧を受けても冷や汗も掻かないで根本は三人に近づく。

優子さんはそんな根本を不快そうな目で見つめていたけど

チエイイス「とぼけるな、根本。貴様らの協定違反を報告に来ただけだ」

根本「ほお？ 俺達の協定違反の報告？ その証拠は有るんですか？」

チエイズ「俺は島田が暴走した現場に居た」

根本「なに？」

ここに来て、根元の顔から余裕が少し消えた。

まあ、チエイズさんが来たって言うのは知ら無さそうだったしね。

優子「まだ分からないの？ アンタが言っていた条約違反の時間前に島田さんは暴走していたって言ってるの」

工藤「それを止めたのも吉井君とチエイズさんだからね。あ、証拠映像も有るよ？」

根本「ちっ！」

小山「……」

優子さんと工藤さんの二人からも証言と証拠映像を突きつけられて何も言えなくなる根本。そしてそれを見つめるだけの小山さん。

チエイズ「お前たちには詳しく話を聞かせてもらう。生徒指導室まで来い」

根本「……分かりました」

小山「あたしもですか？」

チエイズ「いや、今回はBクラスの奴らだけだ」

小山「そうですか、良かった」

それだけ言って小山さんは安心したのか連行される根元を見ようともしなかった。

優子「あら？ 何を安心しているのかしら？」

小山「は？」

優子「今から私たちAクラスはあなた達Cクラスに宣戦布告します」

優子さんのその発言でCクラス内に衝撃が走った

## 9話 立ち上がる者達は何処か？

「私達CクラスにAクラスが試験召喚戦争を挑む？」

「ええ、そう言ったのよ」

Cクラスで起こったBクラスとCクラスによる協定違反。

その現場を抑えた吉井とチェイスたちだったが優子の発言に驚いていた。

「ゆ、優子さん。何で……」

「これはケジメを付けさせるためよ」

「け、ケジメ？」

「そう、ケジメ」

優子の言うケジメが良く分かっていない吉井。

そんな吉井に助け舟を出したのは工藤だった。

「吉井君、つまり優子はこう言いたいんだ。『協定違反をしてFクラスを、私の大切な吉

井君を嵌めて倒そうとした卑劣で下衆で下等なCクラスを完膚なきまでに叩き潰す』つ

て」

「な、なんかアグレッシブな内容だね」



「と言うか、なぜ三拍子なのじゃ？ ブレンの真似かの？」

「うーん、多分そうじゃないかな？」

「愛子!! 勝手な事を言わないでくれる!?!」

「あれ？ 違った？」

「違うわよ！ 前半は良い感じだったのに中盤から可笑しくなってた!!」

「えー何処？ 僕には良く分からないな」

「愛子、あんた絶対に分かっているでしょ!?!」

工藤の散々な言い方に優子が顔を真っ赤にして怒る。

……顔を赤くしている原因は果たしてその言い方だけなのだろうか？

「あれ？ なんで優子はそんなに顔を赤くしているのかなあ？」

「そ、それは……あ、愛子が出鱈目な事を言うから」

「何が出鱈目なのかな？ 優子が吉井君を大切って思っている所？」

「な、ななななな!?!」

「ふふつ、可愛い優子」

（（（小悪魔や！ 小悪魔がここにおるで!?!）））

その場にいた全員が工藤の行動に同じことを考えていた。

「……勝手に話を進めているようだけど、それを受けて私達に何か得が有るの？」

「あら？ そんなの有るに決まっているじゃない？」

「そうだねえ、まず一つに僕達Aクラスの設備が使える」

「第二に、貴方の新しく手に入れた力を私達で試すことが出来る」

「……へえ？ 貴方、この力について何処で知ったのかしら？」

言つて小山は目を細めながら不敵な表情で聞く。

小山の質問に優子は答えず、改めて聞く。

「それで？ 受ける？ それとも受けずに逃げて私達に臆病者つて罵られる？」

「……上等じゃない！ 今は私達の方が最強なのよ！！ その舐めた態度、後悔させてあげる！！」

「決まりね。それじゃあ、戦争開始は明日の1限からで良いかしら？」

「ええ、覚悟しておきなさい」

「それはこっちの台詞ね」

そうして不穏な空気を残して優子達は帰って行った。

「あ、ありがとう。優子さん」

「あら？ それは何に對してのお礼かしら？」

Cクラスから離れてAクラスに向かう途中で吉井はお礼をいう。

しかし、そんな吉井のお札に対して分かっていながらあえてとぼける優子。そんな優子が分かっているのか秀吉と吉井は少し苦笑いしていた。

「僕達がCクラスとBクラスの罠に嵌められた時に助けてくれたことに対するお礼だよ」

「そうじゃ、姉上もとぼけおって」

「あら？ そんなのお札を言われるようなものじゃないもの」

「恰好つけちやつてまあ」

「うるさいわよ愛子!!」

「……はは」

「どうかしたかの？ 明久」

「いや、つい可笑しくてね」

「可笑しくて？」

「うん、あのやり取りがね。つい」

「ああくなるほどのう」

「……何か、元気を貰っちゃった」

「それは良かったの!!」

「うん!! ……明日は絶対に勝つよ。秀吉」

「もちろんじゃ!! あ奴らは学校を、俺たちの大切な場所を、この街を泣かそうとした。絶対に倒すのじゃ」

「それじゃあ、今日の作戦の確認をするぞ」

翌日、Fクラスに到着するやいなや、雄二にそう切り出された。

その場にいる吉井、姫路、土屋、秀吉は真剣な顔で雄二の作戦に耳を傾ける。

「まず、Bクラスは昨日のルール違反のせいで教室前からのスタートとなる」

「なぜ断言できるのじゃ？」

「俺がアイツ等と交渉してそう決めさせたのさ」

秀吉の疑問に胸を張って誇らしげに答える雄二。

自分達が知らない間にそんな事をしていたのかと少し呆れた顔をする吉井

「一体何時の間にそんな交渉していたのさ？」

「お前たちが帰った後、俺が生活指導室に行ってチェイス立会いの下に交渉したんだ」

「言ってくれば良かったのにお」

「お前らが先に帰っちまったんだろうが!!」

少し不満気に文句をいう秀吉に先に置いて行かれた怒りと共に雄二が怒鳴る。

しかし、その顔には怒りの表情は無く、ただただ笑顔だけが有った。

「……それで？ 俺達はどうする？」

「明久と姫路、秀吉はいつも通りに部隊を率いてBクラスを抑えてくれ」

「その隙に俺達は奴らの背後……つまり外からの襲撃を仕掛ける」

「外からつて……ここ3階だよ？ どうやってするつもり？」

「外からの襲撃は……土屋。任せられるか？」

「……引き受けた」

「そう言う訳だ。何か質問は？」

雄二のその言葉におずおずと手を挙げる姫路。

その様子は何か怯えている様子だった。

「あ、あの！ ……わ、私も出ないと駄目ですか？」

「ん？ それは……出てもらわないと困るが」

「そう、ですか……」

「どうした？ 何か不満と言うか不都合な事でも有るのか？」

「そ、そう言う訳じゃ……」

「……………」

吉井は姫路のその様子を見て何か隠したいことが有ると見抜いた。

しかし、その隠したいことが何なのかまでは分からなかった。

(……姫路さん、一体どうしたんだろうか?)

「まあ、済まないが姫路。ここは頑張ってくれ」

「わ、分かりました……」

雄二の頼みを受けて姫路は少し俯きながら答えた。

「さあ! 俺達の戦争を始めるぞ!!」

「以上が今回の試験召喚戦争の作戦です。質問は有りますか?」

雄二たちFクラスが作戦会議している同時刻、Aクラスでは優子が指揮を執っていた。

その姿はまさに美しい軍師の様だった。

優子の隣には工藤、霧島、久保がそれぞれ立って居た。

「なあ? 今回はなんでCクラスと試験召喚戦争をやるんだ?」

Aクラスの男子のその疑問が伝染し、Aクラスからは同様の声上がり始める。

「なぜ下位クラスに挑むのか?」「時間の無駄ではないか?」「やる意味が分からない」

などなどの声が次々に上がる。

それを見て優子は少し目を閉じて、声を上げる。

「良い？ みんな。今日、私達はこの学園の卑怯者と言う名の敵を討つ」

その発言に疑問の声はぴたりと止む。

しかし、優子は続けて話を続ける。

「今回、CクラスはBクラスと結託してFクラスを叩き潰そうとした」

「なんでCクラスがそんな事を？」

「アイツ等は……力を得た。絶対に手を出してはいけない禁忌の力に」

「禁忌の力？」 「それは一体なんですか？」

「それはまだ言えない……しかし、それを得た奴らは何を血迷ったのか自分達こそが最強だと言いだめた」

「良い？ みんな」

そこで優子はようやく目を開ける。その目には怒りの炎が燃え上がっていた。

「奴らは自分たちの力を使わず、紛い物の力に手を出し！ その力で自分たちが最強な  
どど寝言をほざいた!!」

「私達は！ 努力をして今！ このクラスに居る!! 学年の一番最強の！ このAクラスに!!」

「奴らも努力はしたんでしよう……しかし、途中でその努力を放棄した」

「努力を放棄して得たのがそんなまやかしの力で最強を名乗る」

「……みんなに聞きたいわ」

「そんな奴らを……放っておける？ 許せる？」

「私達は愚かにも努力することを諦め！ 安直な力に手を出し！ 他のクラスの者と結託し自分達の利益のみをむさぼり尽そうとした卑怯者、Cクラスと試験召喚戦争を行う」

「此度の戦い、義は私達に有る!! 何も恐れるものは無いわ!!」

優子のその演説を受けてAクラスの生徒達は口々に言う。

「その通りだ！」 「努力して私達はここに居る!!」 「努力しないで力を得るなんて

許せない！」

「……Cクラスの奴らは努力することを止めた。いや、努力することを諦めた」

「『あきらめ』が人を殺す。希望を捨てずにあきらめを拒絶した時、人間は自分の運命を変える権利人に成り得る』私の叔父の言葉よ」

「さあ、みんな。私達は諦めを拒絶する？」

「ああ、するとも!!」 「ええ！ 拒絶して運命を変える!!」 「諦めるなんて出来

るかよ!!」

「よろしい……ならば試験召喚戦争よ」





「絶対に奴らをこの扉から外に出すな!! 教室内に居る間に片を付けるんだ!!」

「よ、吉井君……あのっ」

「姫路さん! 君もみんなの援護を」

「は、はい! え、ええっと」

Bクラスと開戦してから吉井達FクラスはBクラスを外に出さない様に入口に陣取り攻撃を仕掛けていた。

Bクラスの残存勢力を数で何とか押ししていたが突然姫路の動きが止まったのだ。

それをカバーするように秀吉が部隊を率いて姫路の代わりにBクラスの部隊と戦闘していた。

「姫路さん! なぜ戦わないんだ!!」

「す、すいません! で、でも……」

「つく!!」

姫路のその態度をもどかしく思った吉井だったがそれを無視してBクラスの内部を見る。

昨日の戦闘でBクラスの中に居る生徒の数は半分の10数人程度。

しかし、根元の周りをその半分のメンバーが守っている。

そして吉井は根元を良く見てみると彼の机にピンク色の封筒がある事に気が付いた。

(……そう言う事か。根本、君は心底僕を怒らせたみたいだね)

「……姫路さん。戦えないんだったら雄二の護衛に回ってよ」

「え？」

「聞こえなかった？ 戦えないんだったら雄二の事を守っておいでって言ったんだ」

「で、でも……私だって」

「『私だって戦えます』とでも言うつもりかい？ 今、何もしない君が？」

「そ、それは……」

「……君が取り返したいものは僕が取り返す。だから早く行け」

「え？ 吉井君……なんで」

「良いから！ 早く行つて」

吉井は笑顔で彼女の背中を優しく押して雄二の護衛に向かわせた。

姫路も少し戸惑っていたがそのままFクラスに向かって走り出す。

その姫路の姿が見えなくなると吉井は先程まで浮かべていた笑顔を消して能面のよ  
うな表情になった。

「……根本、お前は僕を怒らせた」

「『試獣召喚』!!」

吉井の召喚獣が出た瞬間、その場の空気が変わる。

その場にいた全員が吉井から発せられる凄まじい怒気を感じ取ったのだ。

「根本……君は色々やりすぎた」

「ようやくお出ましか……ひねり潰してやるよ」

吉井が本気を出したのを見ると根本は笑い、自分の周りにいる生徒に命令する。

「さあ、お前ら。試験召喚獣を呼び出せ」

「ここで一気にひねり潰すんだな？」

「そうだ。さあ、出せ」

「おう！ 了解だ!!」

「『『『『試獣召喚』!!』』』」

Bクラスの中でも精鋭と呼ばれる生徒達が一斉に召喚獣を呼び出す。

呼び出された召喚獣が飛び出す前に根本は懐からガイアメモリを取り出し召喚された全ての召喚獣に投げ込む。

「『『『マスカレード!!』』』」

投げ込まれたガイアメモリは各々の召喚獣に付けられた特殊コネクタに入り込みたちまちマスカレードドーパントへと変貌した。

しかし、それを見ても吉井は特に驚いた様子は無くむしろ呆れの表情でBクラスの面々を見つめる。

「良くもまあ、そんなに大量のガイアメモリを手に入れたね。その執念には恐れ入ったよ」

「これをくれた奴らはお前らを心底恨んでいるらしくてな？　俺達が潰すのを手伝うつて言ったらこんなに大量にポンつとくれたぜ」

「ふくん、貴重な情報をありがとう。やつぱり君つてバカなんだね？」

「あっ？」

「そう簡単にペラペラ喋っちゃって、それだけで僕には黒幕が誰か分かるんだよ」

「知った所でどうなる？　もうお前はここで終わるんだ」

「……典型的な三下だね。台詞も行動も」

「OK、OK。分かった、死体も残さねえでやるよ!!」

吉井の言動に切れたのか、根本は懐から更にガイアメモリを取り出して自分の首に有る接続コネクタに挿入する

『『スカル!』』

コネクタにメモリが入ると頭部が光り輝く骸骨、『スカルクリスタル』となった。

そしてスカルドーパントは自分の手を睥たいたり閉じたりして確認する。

「ふ、ははは」

「ふははははははは!!!!  
んだ!!」

体の奥底から力がみなぎってくる!! これで俺は最強となった

「吉井! 今、ここでお前を倒して俺は更なる高みへと昇る!!」

「……はあ。偽りの力で強くなった気になれるなんて本当におめでたいね」

力を手に入れて気分が高揚したのかスカルドーパントは声高らかに吉井に宣言する。  
逆に宣言された吉井は呆れ果てたようにため息を吐いてそう吐き捨てる。

「まあ、来なよ? その偽りの力ごと君を叩き潰して目を覚まさせてあげるからさ!!」

そう言って吉井は戦極ドライバーを取り出して一つのロックシードを開錠し、戦極ドライバーにセットする。

『イチゴ!』

その音声と共に吉井の頭上にクラックが開き赤いイチゴの鎧が浮かぶ。

吉井はカッティングソードを下ろしてその鎧を身に纏う

『ソイヤツ! イチゴアームズ! シュシュツと・スパーク!!』

仮面ライダー鎧武イチゴアームズへの変身を完了した吉井はドーパント軍団へ向かっていく。

Bクラスで最後の戦いの幕が上がった。

「良い!? Aクラスって言っても所詮は雑魚ばかりよ!! 今の私達だったら負けはしない!!」

吉井がBクラスでスカルドーパント達と決戦を迎えたのと同時刻にAクラスとCクラスが廊下でぶつかり合っていた。

Aクラスの数人が着実にCクラスの面々を撃破しているがCクラスの部隊長は慌てる様子も見せず、それどころか不気味に笑っていた。

「各個撃破出来る奴は各個撃破していけ! 残りのメンバーは数で囲んでぶっ倒せ!!」

「「「「おおおおお!!」」」」

「敵は数で押すことしかできない奴らだ! そんな奴らなど恐るるに足らない! 気合を入れろお前ら!!」

「「「「おおおおお!!」」」」

Cクラスの部隊長の指示を受け、その場の全員が懐から『マスカレードメモリ』を取り出して召喚獣に投げ刺す。

するとBクラスの時と同じように召喚獣が『マスカレードパント』へと変異する。

「さあ、これで形勢は逆転する」

「怯むな!! 行くぞ!!」

「駄目! みんな下がって!!」

その場に一人の少女の声が響き、Aクラスの動きが止まる。

その瞬間、大量のミニカーがマスカレードードーパント達に突撃していく。

「ぐう! なんだ!! このミニカーは!!」

「みんなはAクラスに戻って代表たちの守りを固めて!!」

「く、工藤さん!?!」

そこには腰にベルトを巻いた工藤愛子が立っていた。

彼女の様子を見て、普段とは違うと察したAクラスの面々は工藤に言われた通りに翔子の守りを固める為にその場を離れた。

「悪いけど、普段の君達との対戦だったら僕はあんまり干渉する気は無かったよ?」

「ならばなぜ邪魔をする!」

「……そんな力を得た君たちの暴走に僕の大切なクラスメイト達を巻き込む訳には行かないからね」

工藤はそれだけ言うのとベルトのイグニッションキーを回す。

「行くよ、お父さん」

『OK! Start Your Engine!』



ベルトからそんな返答が聞こえると同時に待機音が流れ始める。

そして工藤は手元に有った赤いミニカーを回して左腕のシフトブレスにセットする。

「変身!!」

赤いミニカー『シフトスピード』をそのまま倒すと工藤の身体が光に包まれる

『ドライブ! タイプスピード!!』

変身が完了するとそこには真つ赤な姿をして、胸にタイヤをはめ込まれた戦士が立っていた。

「何だ? お前のその姿は!」

「これ? これは仮面ライダードライブ!」

「仮面ライダー、ドライブ? ……代表の言っていた警戒するべき戦力の事か!」

「まあ、そっちの警戒すべき戦力かなんて知らないけど……僕は実戦ではこれが初乗りだからね」

「さあ、ドーパント共!」

そこまで言うとう工藤は腰を下げて膝に手を置く。

「一つ走り付き合えよ!!」

その宣言と同時にドライブは走り出した!

「はあー！」

鎧武の投げたクナイを受けてまた一体のドーパントが消滅した。

「これで……残りのマスカレードは10体か」

「どうした？ もう息でも上がったか？」

「まさか……でも一体一体をちまちま倒すのも面倒になったからこれで一掃するのさ」

鎧武はそれだけ言うとう無双セイバーにイチゴロックシードをセットして構える。

『イチゴチャージ!!』

音声が聞こえると同時に鎧武は無双セイバーを天に向けて振り放つ。

すると、無双セイバーからピンク色のクナイが点に向けて放たれそこから大量の小型

クナイが雨の様に降り注いだ。

「なに!!」

スカルドーパントはすぐにその範囲外から離脱したが残っていたマスカレードドー

パントは全てそのクナイの雨を受けて爆発、消滅した。

「ばかな!! あの数を一瞬で!?!」

「残ったのは君だけみたいだね?」

鎧武はイチゴロックシードを取り別のロックシードをセットする。

『パインー!』

パイનロックシードを開錠すると戦極ドライバーにセットしてカッティングソードで切り開く。

『パインアームズ!! 粉碎 デストロイ!!』

そのままパインの鎧がクラックから鎧武に向かって落ちてきて変身が完了する。

鎧武は手に持った「パインアイアン」を振り回してスカルドーパントを威圧する。

「さあ、覚悟してよ? 根本」

「ぐっ!!」

鎧武は手に持ったパインアイアンをスカルドーパントに向けて投げつける。

しかし、その攻撃は突然弾かれる

「なに!?!」

「……………なあんてな!!」

スカルドーパントの横から巨大な頭蓋骨の化け物が2体現れた。

その化け物にパインアイアンを弾かれたようだった。

「そいつらは…………」

「俺の能力で生み出した分身さ! 力はその形態のお前よりは強いぜ?」

スカルドーパントは余裕そうに鎧武をあざ笑う。

そしてその手を挙げて骸骨の化け物に指示を出す。

「そいつを殺せ」

言葉に従うように歩き出す化け物二体。

その様子を見て少し後ずさりしそうになる鎧武。

万策尽きたと思われたその時！ 一筋の風が教室に吹き荒れた!!

「な!?! 何だこの風は!!」

「……大丈夫か? 吉井」

「む、ムツツリーニ!?!」

目の前に現れたのはサイクロンメモリを使い駆けつけたムツツリーニだった。

そして吉井の前に立ったムツツリーニの目は敵を見据えていた。

「吉井……いつもお前には戦わせてばかりだった。すまない」

「ムツツリーニ……いや、良いんだ。これは僕が好きでやっていることだし」

「だがそれも終わりだ……」

「え?」

「これからは……俺もお前と戦う!」

そう言うとうムツツリーニは懐に一つのベルトを巻く。

ベルトが巻き終わるとムツツリーニは一つのガイアメモリを起動させる

『エターナル!!』

「変身!!」

『エターナル!!』

ガイアメモリをベルト『ロストドライバー』にセットしそのままスロットを倒して変身を完了させる。

そこには真つ白な姿と所々に青い炎の模様が入った戦士が立って居た。

「お前は何者だ!？」

「俺は……仮面ライダーエターナル」

「仮面ライダーエターナルだあ!？」 また仮面ライダーか!!」

「お前の楽しみはここで終わる。さあ、ここからはお前は別の楽しみ時間だ」

「さあ、地獄を楽しみな!!」

永遠の名を持つ戦士、仮面ライダーエターナルはスカルドーパントへ向かって行った  
!!